

(6) 堡塁6号(第36図)

半円形堡塁で、山頂北東側に集中する6基の堡塁群では一番東側に位置する。東側斜面を意識した構築となっている。

現況計測値は、全長516cm、最大幅500cmで、胸壁の厚さ328cm、高さ36cmである。土坑は隅丸長方形を呈しており、深さ36cmである。

胸壁は等高線に沿って、傾斜に向かって緩く弧を描いている。東側斜面側を利用して、胸壁を構築しており、裾野が広く厚い。土坑は明らかに掘削をしており、その掘削土を利用して胸壁を一段盛り上げている。土坑の南側は明瞭な掘り込みではなく、平坦面を形成している。堡塁3号と同じく、出入り口等の可能性も考えられる。

遺物は、土坑から針金(第44図26)と釘(第44図27)が出土しているが、当時の遺物かは不明である。南側隣接地には、砲弾の可能性のある鉄塊(第44図24)が出土している。

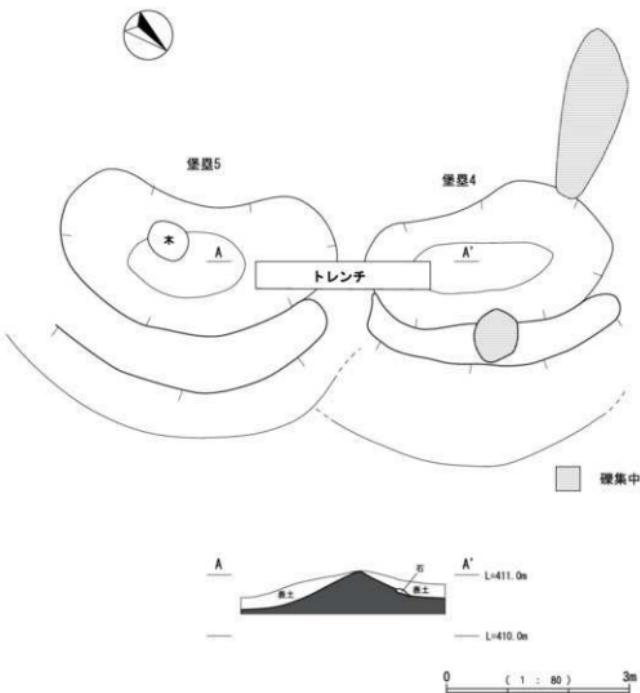
(7) 堡塁7号(第38図)

半円形堡塁で、高熊山激戦地跡最大の堡塁である。山頂東側に集中する6基の堡塁群の中では後方に位置しており、堡塁群及び北東斜面を意識した配置となっている。

現況計測値は、全長1080cm、最大幅700cmで、胸壁の厚さ230cm、高さ50cmである。土坑は大きな半円状で深さが50cmである。

倒木の影響で、堡塁が大きく破損した部分に、扇形状のトレンチを設定して調査を行った。

胸壁は2つの埋土からなり、1は、非常に固い褐色粘質土である。多くの輝石安山岩の礫を含む。地盤の土に近い。2は樹痕の影響のため褐色土と黒褐色土の混じりで、しまりが弱い。10cmの大いな礫を含む層である。その下は、非常に固い岩盤で、多量の輝石安山岩や巨石を含む。土坑の埋土は、表土の腐植土のみで、床面は、非常に固い岩盤で平坦面を形成している。胸壁最顶部と土坑床の高低差は、74cmで深い。胸壁埋土が、地山の



第37図 高熊山激戦地跡 堡塁4・5号トレンチ図

色調に近く、多量の礫を含むことから、土坑を掘削した土をそのまま胸壁に利用していると考えられる。

土坑は掘削されているが、北側は掘り込みが浅く、南側は深くなっている。その比高差は約 50 cm である。堡壘 3 号・6 号同様に出入り口等の可能性が考えられる。

胸壁の中からは、エンフィールド銃の銃弾（第 43 図 6）が出土している。弾頭が堡壘を向いており、北東から堡壘胸壁に向かって打ち込まれている。胸壁は貫通してはいない。胸壁北側からは、薬莢（第 43 図 23）が出土し

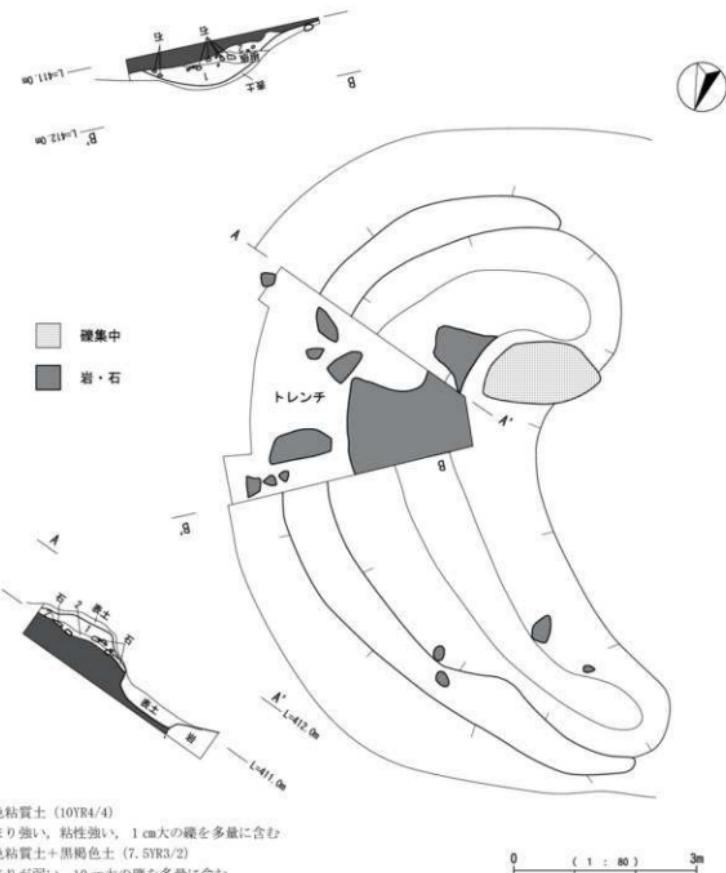
ている。

(8) 堡壘 8 号（第 39 図）

山頂中央部に、単独で構築されている半円形堡壘である。北西斜面を意識している。

現況計測値は、全長 800 cm、最大幅 486 cm で、胸壁の厚み 200 cm、高さ 160 cm である。

胸壁は等高線に沿って、傾斜に向かってわずかに弧を描いている。土坑は胸壁に沿うように長楕円形を呈しており、深さは 20 cm である。



第 38 図 高熊山激戦地跡 堡壘 7 号実測図

胸壁には、巨石と地形の傾斜を最大限利用して、構築している。

周辺からは遺物の出土はなかった。

(9) 堡塁9号（第40図・第41図）

山頂南西部に、単独で構築されている半円形堡塁である。西北西斜面を意識している。

現況計測値は、全長664cm、最大幅624cmで、胸壁の厚さ360cm、高さ36cmである。土坑深さ36cmである。

胸壁は、地形と巨石を利用して、約120cmの高低差を生み出している。そのため、西北西斜面からだと、堡塁の存在は確認できない。巨石には銃弾痕のような凹みは見られない。土坑は明らかに掘削をしている。胸壁、土坑とも北東側で地形の傾斜に沿うように構築されている。

堡塁中央部に500×50cmのトレンチを設定して、調査を行った。

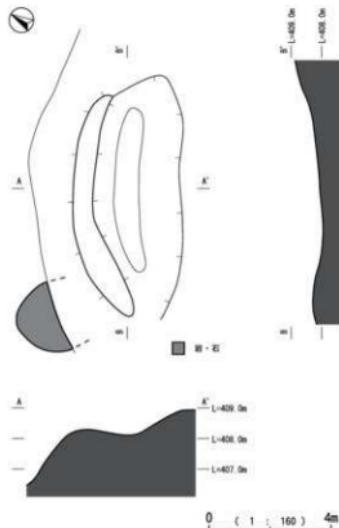
胸壁は岩に構築されており、最頂部付近では10cm大の多くの礫から構成されている。胸壁全体が礫を積み上げた構築方法となっている。土坑は20cm表土に覆われており、56cmの深さとなる。

周辺から遺物の出土はなかった。

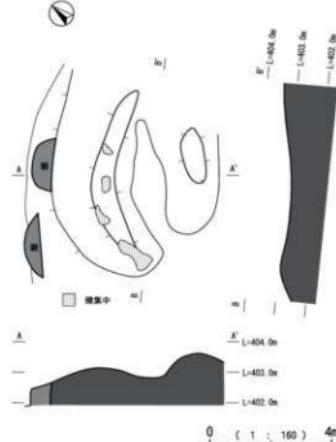
4 出土遺物について

今回の調査では、28点の遺物が出土した。そのうち、西南戦争時の遺物として、銃弾16点・薬莢4点を図化している。また、時期不明であるが西南戦争時の遺物の可能性があるものとして、鉄製品4点・鉗1点・古銭1点を図化している。遺物の出土は、調査対象範囲の北側～東側斜面に集中しており、西側・南側では遺物の出土はなかった。

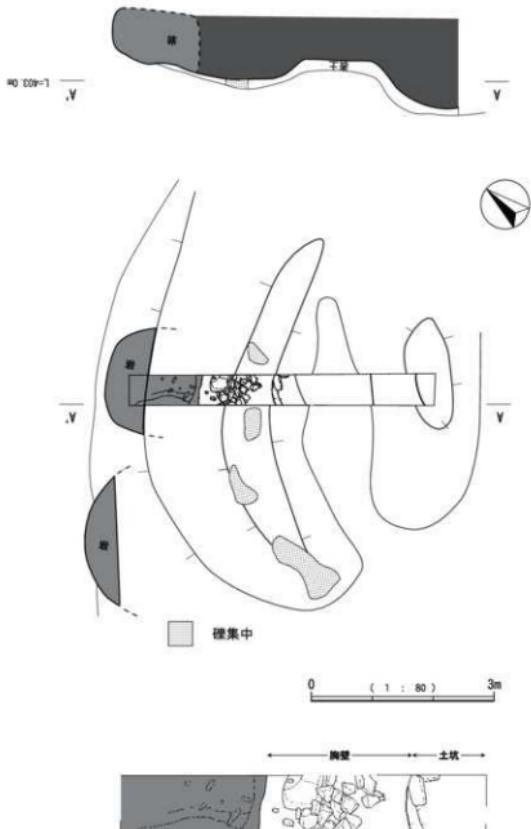
銃弾及び薬莢の部位名称及び計測箇所については、第42図のとおりである。



第39図 高熊山激戦地跡 堡塁8号実測図



第40図 高熊山激戦地跡 堡塁9号実測図



トレンチ拡大図

0 (1 : 40) 1m

第 41 図 高熊山激戦地跡 堡塁 9 号 トレンチ図

(1) 銃弾 (第43図4~19)

4から19は銃弾で、すべて鉛製である。

4から10は、前装式のエンフィールド銃に使用された銃弾である。薬莢は紙であり、使用時は紙を破って火薬を銃口に挿入し弾を込める。いずれの銃弾も、弾丸製作時のバリ痕が残り、弾底部回断面形が台形状を呈していることから、鋳型などで鋳造されたと考えられる。

4は側面及び弾頭上部にバリ痕が残り、横方向の筋状痕と発射圧のため弾底部間に0.5mmほどの穴が確認される。5は側面及び弾頭上部にバリ痕が残り、全長が最も長い。6は側面及び弾頭上部にバリ痕が残り、横方向の筋状痕が明瞭である。7は側面及び弾頭上部にバリ痕が残り、横方向の筋状痕、弾頭部の剥離が見られる。弾底部側縁が変形し、外へ開いている。8は側面にバリ痕が残り、弾頭部の剥離が激しい。側面に煤状の付着物がある。9は側面及び弾頭上部にバリ痕が残り、横方向の筋状痕がある。弾底部側縁が外側に開いている。また、弾底部回断面形が台形状であったものが、発射圧力により穴が空き、変形している。10は側面にバリ痕が残り、横方向の筋状痕がある。弾底部回断面形が台形状であったものが、発射圧力により内部に穴が空き、大きく変形している。

11~17は後装式のスナイドル銃に使用された銃弾である。銃弾の周縁に4本の圓溝が刻まれるのが特徴である。雷管一体の金属薬莢と1対で、実包として使用される。

11は弾頭部に径4mm・深さ1mmの凹みがあり、弾底部側縁は、発射または着弾時の衝撃で欠損している。弾底部回断面形は台形状である。12は弾頭部に径4mm・深さ2mmの凹みがあり、圓溝は鋸歯状に蛇行している。弾底部回断面形は台形状である。13は圓溝が鋸歯状である。弾底部側縁は外側に開き変形している。弾底部回断面形は台形状である。14は弾底部回断面形が台形状であるが、他の銃弾より深い。15は弾頭部が変形しており、弾底部側縁は内側に押し込まれている。弾底部回断面形は円柱状で他の銃弾と比べ深い。16は発射及び着弾により、弾頭部が変形しており、弾底部は弾殻が薄くなっている。内側に変形している。圧入栓が残り、蛍光X線分析の結果、金属製(鉄と鉛)と判明している。弾頭部には横方向、弾中段からは縱方向の筋状痕が残る。17は圓溝が鋸歯状を呈しており、圧入栓が少し外にはみ出している。圧入栓は、蛍光X線分析の結果、金属製(鉄と鉛)と判明している。弾頭に縱方向の密な線状痕が明瞭に残る。

18はブーメラン状に大きく変形した銃弾である。内面に3本の細い溝が作られている。

19は後装式のツンナール銃の銃弾である。弾頭及び弾底部を球状として、曲線で連結しており、ウリのような形状をしている。弾底部には径が3mm、深さ1mmほどの円形の凹みがある。

(2) 薬莢 (第43図20~23)

20~23は、スナイドル銃の薬莢底部である。

20と21は蛍光X線分析の結果、銅製である。底側に凹みと円形の溝、内側には詰め物が残り、2つの孔がある。22と23は蛍光X線分析の結果、鉄製である。底側の腐食が激しい。内側には詰め物が残り、半円状の突起がある。

実包や脆弱な外表紙や真鍮製薬莢筒は出土しなかった。

(3) その他の遺物 (第44図24~29)

24と25は鉄塊である。四斤山砲の砲弾破片の可能性がある遺物として図化した。丸みを帯びており、鉄製で腐食が激しい。

24は大きさ5.4cm、厚み1.6cmで、断面形が弧状である。元々丸い形状で、破損した砲弾の一部と考えられる。腐食が激しく、全体的に錆が酷い。25は大きさ5.9×3.3cm、厚み1.3cmで、断面形が弧状である。元々丸い形状で、破損した砲弾の一部と考えられる。表面に1.4cmの円状の凹みがある。砲弾のスタット(箭翼)を埋め込んだ箇所の可能性がある。腐食が激しく、全体的に錆が酷い。

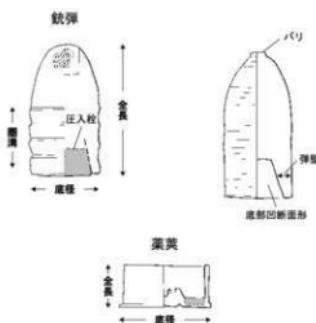
26と27は堡壁6号内表土より出土した。

26は鉄製で針金のような遺物である。

27は鉄製で、和釘のような形状である。全長7.4cmだが、欠損しておりもう少し長い可能性がある。厚みが0.4cmで、断面形は四角に近い。

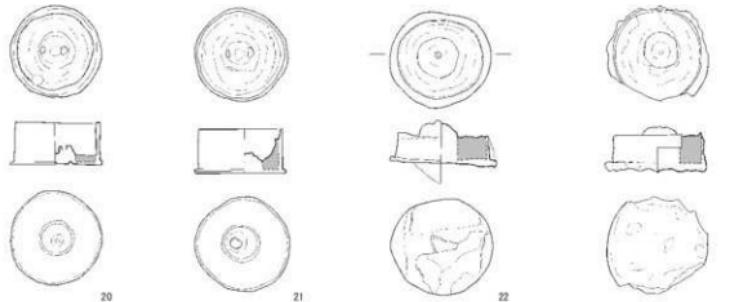
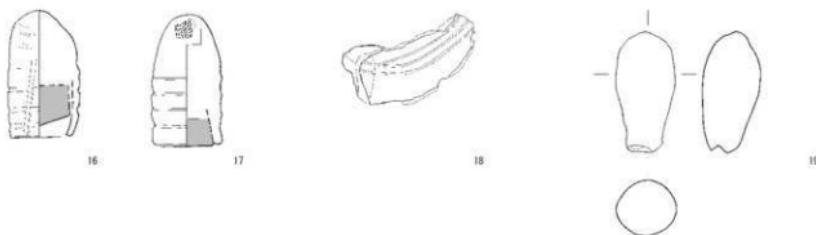
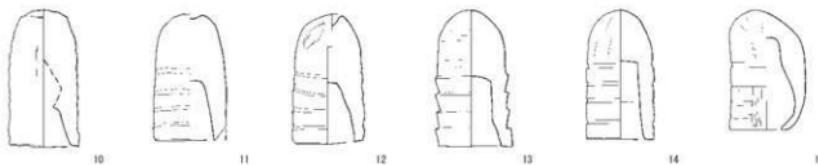
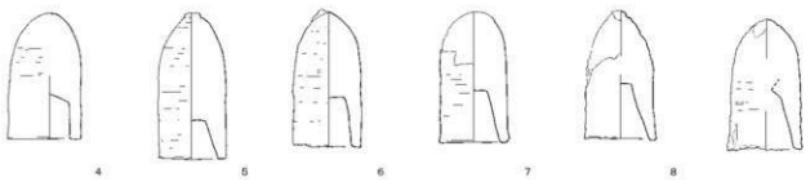
28は銅製の鉗である。X線撮影したが、文様は不明であった。軍服の鉗の可能性がある。

29は乾隆通宝である。1736年に清で鋳造されたもので、西南戦争時の遺物の可能性は少ない。高熊山山頂に祠があるので、そこに供えられた可能性がある。



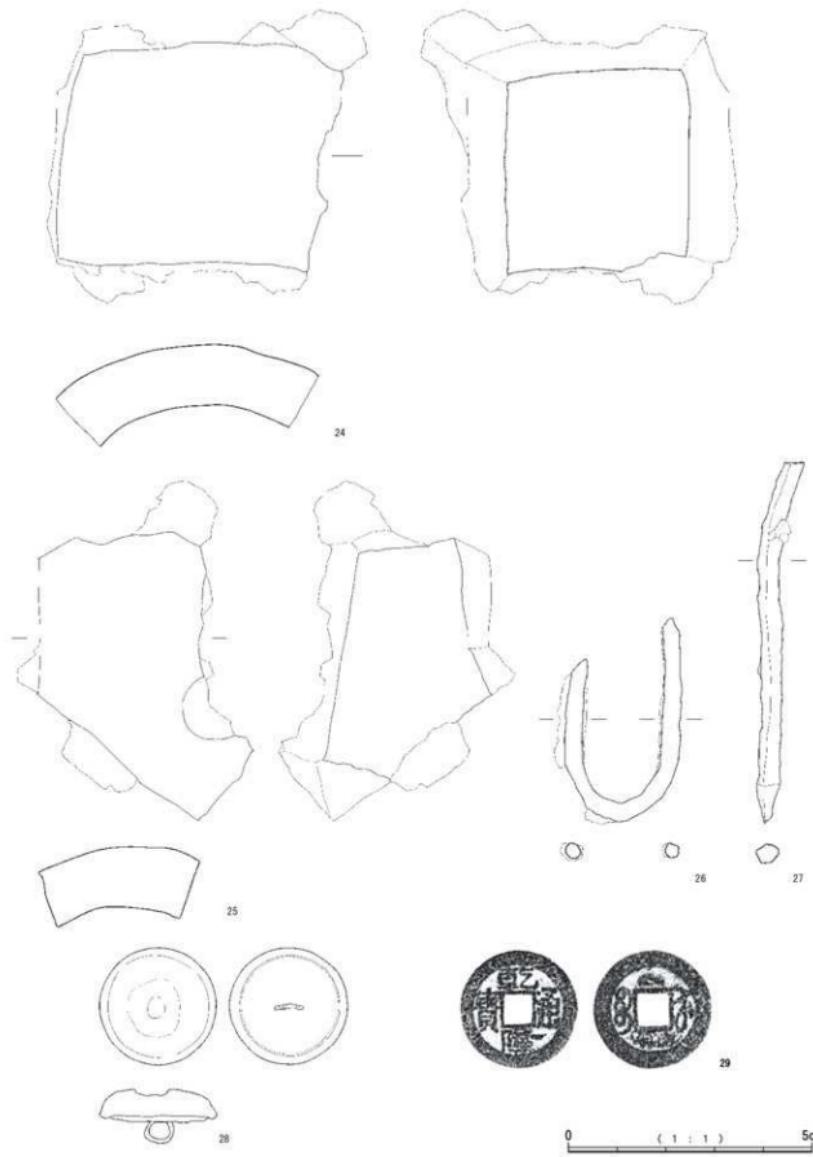
バリ···ベンチ状の鉢型で、鋳造した時にできる
縫合せた底

第42図 銃弾及び薬莢部位名・計測箇所



0 (1 : 1) 5cm

第43図 高熊山激戦地跡 出土遺物(1)



第44図 高熊山激戦地跡 出土遺物（2）

第 10 表 高熊山激戦地跡 堡壘観察表

単位 (cm)

堡壘名	分類	全長方向	全長	幅方向	最大幅	胸壁の厚さ	胸壁高さ
堡壘 1	半円形	東西	640	南北	384	128	24
堡壘 3	半円形	東西	660	南北	464	280	36
堡壘 4	半円形	北西 - 南東	410	北東 - 南西	464	236	40
堡壘 5	半円形	北西 - 南東	500	北東 - 北西	420	164	64
堡壘 6	半円形	南北	516	東西	500	328	36
堡壘 7	半円形	南北	1080	東西	700	230	50
堡壘 8	半円形	北東 - 南西	800	北西 - 南東	486	200	160
堡壘 9	半円形	北東 - 南西	664	北西 - 南東	624	360	36

単位 (cm)

堡壘名	分類	長軸方向	長軸	短軸方向	短軸
堡壘 2	タコツボ形	南北	244	東西	220



第 45 図 高熊山激戦地跡 堡壘 7 号復元状況

第 11 表 高熊山激戦地跡 銃弾 観察表

掲図番号	掲載番号	実測番号	取上番号	層位	銃弾種類	材質	法量(cm)			圓溝	弾底部断面形	バリ痕	色調	備考
							全長	底径	重量(g)					
42	4	高熊山2	2	表土	エンフィールド	鉛	2.6	1.5	27.4	—	台形	有	暗青灰 (SPB4/1) 灰白(5T8/1)	堡壘3号出土
42	5	高熊山20	20	表土	エンフィールド	鉛	3.0	1.4	31.5	—	台形	有	灰白(5T8/1)	
42	6	高熊山19	19	表土	エンフィールド	鉛	2.8	1.5	29.5	—	台形	有	灰白(5T8/1)	堡壘7号出土
42	7	高熊山18	18	表土	エンフィールド	鉛	2.7	1.5	30.9	—	台形	有	灰白(5T8/1)	堡壘3号出土
42	8	高熊山17	17	表土	エンフィールド	鉛	2.7	1.5	26.4	—	台形	有	灰白(5T8/1)	堡壘3号出土
42	9	高熊山11	11	表土	エンフィールド	鉛	2.7	1.6	33.0	—	台形	有	灰白(5T8/1)	堡壘3号出土
42	10	高熊山12	12	表土	エンフィールド	鉛	2.8	1.4	33.0	—	台形	有	暗青灰 (SPB4/1) 灰白(5T8/1)	堡壘3号出土
42	11	高熊山1	1	表土	スナイドル	鉛	2.6	1.5	26.9	4	台形	無	灰白(5T8/1)	
42	12	高熊山7	7	表土	スナイドル	鉛	2.7	1.5	27.6	4	台形	無	灰白(5T8/1)	
42	13	高熊山21	21	表土	スナイドル	鉛	2.8	1.6	29.9	4	台形	無	灰白(5T8/1)	
42	14	高熊山23	23	表土	スナイドル	鉛	2.7	1.4	29.7	4	台形	無	灰白(5T8/1)	
42	15	高熊山3	3	表土	スナイドル	鉛	2.4	1.5	29.4	(4)	円柱状	無	灰白(5T8/1)	堡壘3号出土
42	16	高熊山6	6	表土	スナイドル	鉛	2.6	1.5	28.1	4	金属製栓	有	無	灰白(5T8/1)
42	17	高熊山9	9	表土	スナイドル	鉛	2.7	1.4	28.8	4	金属製栓	有	無	灰白(5T8/1)
42	18	高熊山24	24	表土	不明	鉛	(2.8)	(1.3)	11.0	—	不明	不明	灰白(5T8/1)	
42	19	高熊山22	22	表土	ツンナール	鉛	2.5	最大幅 1.3 最小幅 0.7	19.9	—	—	無	灰白(5T8/1)	堡壘5号出土

第 12 表 高熊山激戦地跡 菜莢 観察表

掲図番号	掲載番号	実測番号	取上番号	層位	銃弾種類	材質	法量(cm)			色調	備考
							全長	底径	重量(g)		
42	20	高熊山4	4	表土	スナイドル	銅	0.9	1.9	3.8	オリーブ褐色(2.5YR4/4)	堡壘4号出土
42	21	高熊山8	8	表土	スナイドル	銅	0.9	1.9	4.4	オリーブ褐色(2.5YR4/4)	
42	22	高熊山15	15	表土	スナイドル	鉄	0.9	2.3	5.0	オリーブ褐色(2.5YR4/4)	
42	23	高熊山16	16	表土	スナイドル	鉄	0.9	1.7	6.0	オリーブ褐色(2.5YR4/4)	堡壘7号出土

第 13 表 高熊山激戦地跡 鉄製品 観察表

掲図番号	掲載番号	実測番号	取上番号	層位	種類	材質	法量(cm)				色調	備考
							長さ	幅	厚さ	重量(g)		
43	24	高熊山14	14	表土	鉄塊	鉄	5.4	4.5	1.6	207.0	赤黒色(10R2/1)	砲弾破片?
43	25	高熊山26	26	表土	鉄塊	鉄	5.9	3.3	1.3	133.7	赤黒色(10R2/1)	砲弾破片?
43	26	高熊山5	5	表土	針金	鉄	4.2	—	0.4	4.9	赤黒色(10R2/1)	堡壘6号出土
43	27	高熊山13	13	表土	釘	鉄	7.4	—	0.4	5.9	赤黒色(10R2/1)	堡壘6号出土

第 14 表 高熊山激戦地跡 鉄観察表

掲図番号	掲載番号	実測番号	取上番号	層位	材質	法量(cm)			色調	備考
						全長	厚さ	重量(g)		
43	28	高熊山25	25	表土	銅	2.4	0.7	2.7	オリーブ褐色(2.5YR4/4)	

第 15 表 高熊山激戦地跡 古銭 観察表

掲図番号	掲載番号	実測番号	取上番号	層位	種類	法量(cm)				色調	備考
						全長	厚さ	孔	重量(g)		
43	29	高熊山10	10	表土	乾隆通宝	2.5	0.1	0.6 四角	3.9	オリーブ褐色(2.5YR4/4)	

チシャケ迫堡墨跡群

第5章 チシャケ迫堡塁跡群

第1節 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

チシャケ迫堡星跡群は霧島市牧園町三体堂字チシャケ迫（ちしゃがさこ）に所在する。

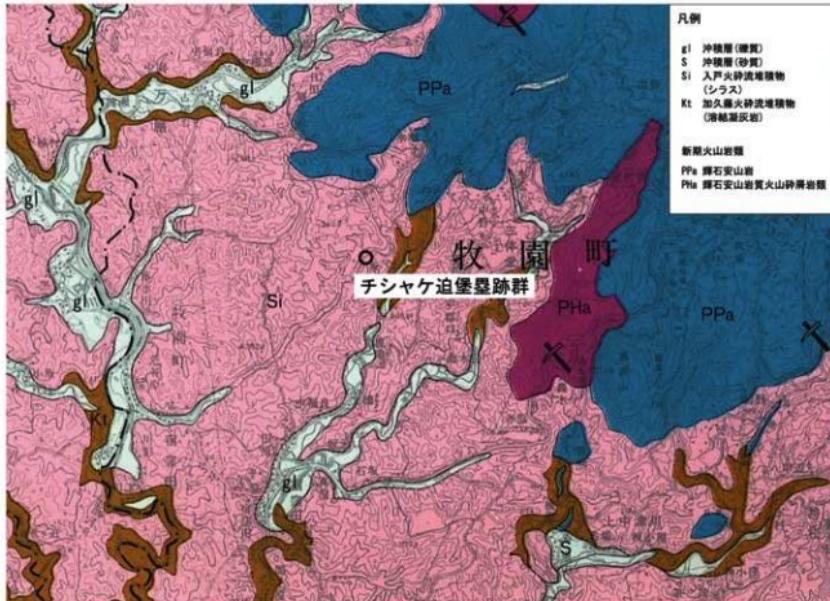
霧島市は、国分市と姶良郡溝辺町・横川町・牧園町・霧島町・隼人町・福山町の1市6町が2005年に合併し、誕生した。東西30.7km、南北37.5km、面積603㎢、人口125,302人（令和2年7月1日）で、規模・人口とも県内2番目の自治体である。霧島市の位置は、鹿児島県のほぼ中央、大隅半島と薩摩半島の交点に位置する。西に姶良市・薩摩郡さつま町・姶良郡湧水町、北に宮崎県えびの市・小林市・都城市、東は曾於市・鹿屋市、南部は垂水市と隣接している。

自然地形は、北東部に韓国岳・御鉢・中岳に代表される複合火山である霧島連山、北西部に国見岳・鳥帽子岳等の山々を有する。霧島連山は、最高峰の韓国岳（標高1,700m）をはじめ、天孫降臨の神話で知られる雷峰、高千穂峰など、20数座からなる。昭和9（1934）年に日本で最初の国立公園に指定され、平成22（2010）年

には日本ジオパークに認定された。中部は火山噴出物であるシラス層の丘陵台地、南部は霧島連山などから南に流れる河川によって、東西約6km、南北約7km、面積15㎢の三角州の低地である国分平野が広がる。

チシャケ迫堡星跡群の位置する牧園町は、霧島連山の南西部に広がる。火山噴出物の重なりで構成された標高200～600 m の高原状の山麓に位置している。地形は北東部が高く西南部が低い波状高地で、谷間は一般に深く切り立った急峻で複雑な様を呈し、平坦地は極めて少ない。南西部には、天降川が中津川・石坂川・三体川・万勝川などの支流を集め南流し、南東部にも霧島川が流れ、渓谷や谷間を形成している。チシャケ迫堡星跡群のある三体堂周辺は、入戸火砾堆堆積物（シラス層）が堆積した丘陵台地で、天降川支流の三体川や石坂川によって浸食された標高250～300 m の段丘を形成してゐる。また、その下流の牧園町宿原田付近では、火山灰による冲積地を形成している。

チシャケ迫堡塁跡群は、市道高野線と市道浅谷線の分岐点となっており、旧来は東に延びる市道浅谷線が集落



第46図 チシャケ追堀墨跡群 周辺地質分類図（鹿児島県、1990『鹿児島県の地質』改変）

の道として使用されていたようである。遺跡の立地は、標高 296.7 m の独立した丘陵にあり、頂上から山麓にかけて急峻な地形となっている。市道までは約 30 m の高低差があり、北側から進行していく政府軍を見張るのに、絶好の位置に面している。

2 歴史的環境

(1) 周辺の遺跡

霧島市牧園町では 72 か所（令和 2 年 1 月）が「周知の埋蔵文化財包蔵地」として登録されている。チシャケ追堀型跡群周辺の遺跡は、鹿児島湾に注ぐ天降川水系の万勝川、三体川、中津川に沿って立地するものが多く見られるが、これらの遺跡は、採集遺物の報告が中心で、発掘調査された遺跡は少ない。以下にチシャケ追堀型跡群周辺の旧牧園町域を中心に、時代ごとの概要について述べる。

旧石器時代

旧石器時代の遺跡としては、成政 A・B 遺跡と万勝川を挟んで対岸にある宮園原遺跡で、黒曜石の尖頭器が採集されたことが報告されているだけである。

縄文時代

縄文時代に入ると遺跡数が増加し、万勝川流域左岸の丘陵端部に位置する九日田遺跡は、中期末から後期初頭の堅穴住居跡 4 軒、阿高式土器や、石鏃等が出土している。万勝川右岸に位置する中福良遺跡は、春日式土器や黒川式土器などの中期～晚期の遺物が出土している。牧園町東部の霧島町との境近くの丘陵部には界子遺跡があり、早期の石斧の集積遺構と石坂式土器、押型文土器、平柄式土器などが出土している。

弥生時代・古墳時代

弥生時代の遺跡としては、中福良遺跡で、刻目突帯文土器が出土しているが、中園遺跡で古墳時代の地下式横穴墓 2 基が発見され、玄室から鉄鏃が出土している。

古代

古代については宿屋田付近に、和氣清麻呂が大隅国に流された地とする伝承があり、稲積塚や稲積の里と呼ばれていたとされ、国府（国分寺）を守護する稲積城があつた地とも言われている。しかし、伝承で根拠不明な部分が多く、推定の城を出ていない。この地に馬を放牧したので牧園の名が起こったとも言われている。

中世

中世の遺跡としては、台地の先端部に位置している中福良遺跡からは、掘立柱建物跡 1 棟が報告されている。中園遺跡からは、遺構の報告はないが、遺物として、須恵器、土師器、白磁、青磁、土製形代が出土している。

近世

近世になり、牧園一帯が「踊郷」・「踊」と呼ばれるようになる。由来は、中世に天降川近くにあった踊城によるものと言われている。調査されている遺跡としては、

万勝川流域の沖積地に位置している中園遺跡から掘立柱建物跡 2 棟と堅穴住居跡があり、陶磁器類が出土している。掘立柱建物跡は桁行 9 m、梁行 5 m と規模が大きく、特殊な遺構である可能性が指摘されている。

3 チシャケ追堀型跡群概略

牧園（旧踊郷）において、政府軍と西郷軍は 7 月と 8 月の 2 度に渡り、戦闘を行っている。ともに西郷軍は敗退しており、当時地元では 7 月の西郷軍敗退を「踊の一度敗れ」、8 月を「踊の二度敗れ」と呼んで残念がったと言われている。

7 月の踊開での西郷軍と政府軍の戦力については、西郷軍は、辺見十郎太率いる雷撃隊が主力で、約 2,000 人で編成されたが、牧園での戦闘時には、1,000 人程度になっており、これに他の隊を加えても 2,000 人程度と推定される。少しではあるが、野砲や臼砲も備えていたようである。（手嶋 2018）

政府軍は、1 個旅団が約 6,000 人で、さらに警備隊・砲隊・工兵隊・補給など、西郷軍を遙かに凌駕する戦力であった。

(1) 7 月の戦闘状況

6 月 20 日に大口で敗退した西郷軍（辺見十郎太率いる雷撃隊・干城隊・正義隊・行進隊の一部と熊本隊、協同隊など）は、軍務所のある横川まで退却した。7 月 1 日には、さらに横川から踊郷に軍務所を移した。このとき西郷軍は、横川方面から追ってくる政府軍（第 2・3 旅団）を迎撃するため、万勝の扇之迫から宿屋田の踊城址まで南北に広大な地域に堡塁を築いた。

西郷軍の陣、滞在期間は 7 月 1 日から 7 日までの 1 週間であり、政府軍の進攻前に西郷軍は大崖方面（霧島市霧島町）へ撤退しているため本格的な戦闘は行われていない。戦況は以下の通りである。

7 月 1 日

政府軍、幸田・恒次（旧栗野町）から横川へ進撃。

西郷軍、横川から踊へ退却。西郷軍は、万勝川東岸の山々に堡塁を築いて防衛。

7 月 2 日

加治木の西郷軍、別府川を挟んで第 4 旅団と交戦。

7 月 3 日

下植村の西郷軍、芦谷原へ後退。浅谷の熊本隊、政府軍と交戦。加治木の西郷軍、一部を小田越の守備に当て、主力は国分へ退却。

7 月 4 日

第 3 旅団の一部、下植村・有村・落水田まで進出して堡塁を築く。芦谷原の西郷軍と交戦。

7 月 5 日

翌日の 6 日に、第 2 旅団は踊本道と万勝方面から、第 3 旅団は赤水・海老ヶ迫方面から総攻撃を仕掛ける命令が出る。その後、第 2 旅団は小林方面へ向かうよう命令

が出たため、總攻撃は7日へ延期。第3旅團は植村の前面のスミ山（位置不明）に本陣を構え、攻撃準備。

西郷軍の辺見十郎太は国分方面の振武隊・行進隊を援護するため、踊の兵の一部を引き抜いて出陣。

7月6日

国分の西郷軍、敷根に退却。辺見、踊へ引き返す。横川方面と国分方面からの挟撃を恐れた西郷軍は深夜から7日未明にかけて大塙・田口方面に總退陣。

7月7日

第3旅團、踊へ進撃。西郷軍はすでに退却しており踊での戦闘は無し。大塙へ追撃を行った部隊が持松の住之段で西郷軍と交戦。

（2）8月の戦闘状況

可愛岳を突破した西郷軍が鹿児島へ戻る途中の8月30日に踊で戦闘が行われている。31日未明、西郷軍は笠取峠の突破を諦め、蒲生を通って、9月1日に鹿児島へ突入した。戦況は以下の通りである。

8月30日

西郷軍（約300人）、吉松を発ち溝辺方面へ向かう。横川で政府軍の迎撃を受けたため、踊へ進路変更。踊郷手前の笠取峠にて政府軍と激しい戦闘。西郷ら幹部は芦谷原の前田万兵衛宅（現在「南州翁宿營之跡」（第47図）の碑文が建つ）で待機。

8月31日

笠取峠の突破を諦めた西郷率いる本隊は、前田家の下方を流れる金山川を渡り、赤水から岩穴・三纏を抜け溝辺から蒲生へ向かった。笠取峠の部隊も政府軍に悟られないように本隊を追った。

（3）研究史

牧園（踊郷）での2度の戦いで築かれた多数の堡塁跡が横川・牧園一帯に多数存在していることが、霧島市文化財保護審議会委員や鹿児島県文化財保護指導委員をされている手嶋正次によって報告されている（手嶋2014・2018・2020）。

手嶋ら地元有志の調査によれば、横川・牧園一帯に現存している堡塁の数は約300基に達する。これらの堡塁は7月と8月の戦闘のものが混在しており、胸壁の方向と戦闘記録などから、西郷軍と政府軍、両軍の使用した堡塁の検討を行っている。

【引用・参考文献】

- 手嶋正次 2014『西南戦争の堡塁に関する調査報告書』
- 手嶋正次 2018『堡塁群が語る西南戦争～霧島の山々に眠る「十年の戦の跡」～』
- 手嶋正次 2020『西南戦争 牧園に残る戦いの証拠』
- 牧園町郷土誌編さん委員会 1991『牧園町郷土誌改訂版』
- 牧園町教育委員会 1989『界子仏道跡・高天原道跡』
- 牧園町教育委員会 1991『中園道跡』
- 牧園町教育委員会 1995『九日田道跡2』
- JACAR（アジア歴史資料センター）『誰書明治10年7月1日～

10年7月31日（防衛省防衛研究所）』

Ref. C09084597600

JACAR（アジア歴史資料センター）『戦闘景況戦闘日誌明治10年2月25日～10年9月24日（防衛省防衛研究所）』

Ref. C09084161800 Ref. C09084164200

Ref. C09084167600 Ref. C09084167900

JACAR（アジア歴史資料センター）『戦闘報告表明治10年5月18日～10年7月10日（防衛省防衛研究所）』

Ref. C09084806900 Ref. C09084807000

Ref. C09084807100 Ref. C09084807200

Ref. C09084807300 Ref. C09084807600

Ref. C09084807800 Ref. C09084807900

JACAR（アジア歴史資料センター）『電報緒5明治10年7月1日～10年7月16日（防衛省防衛研究所）』

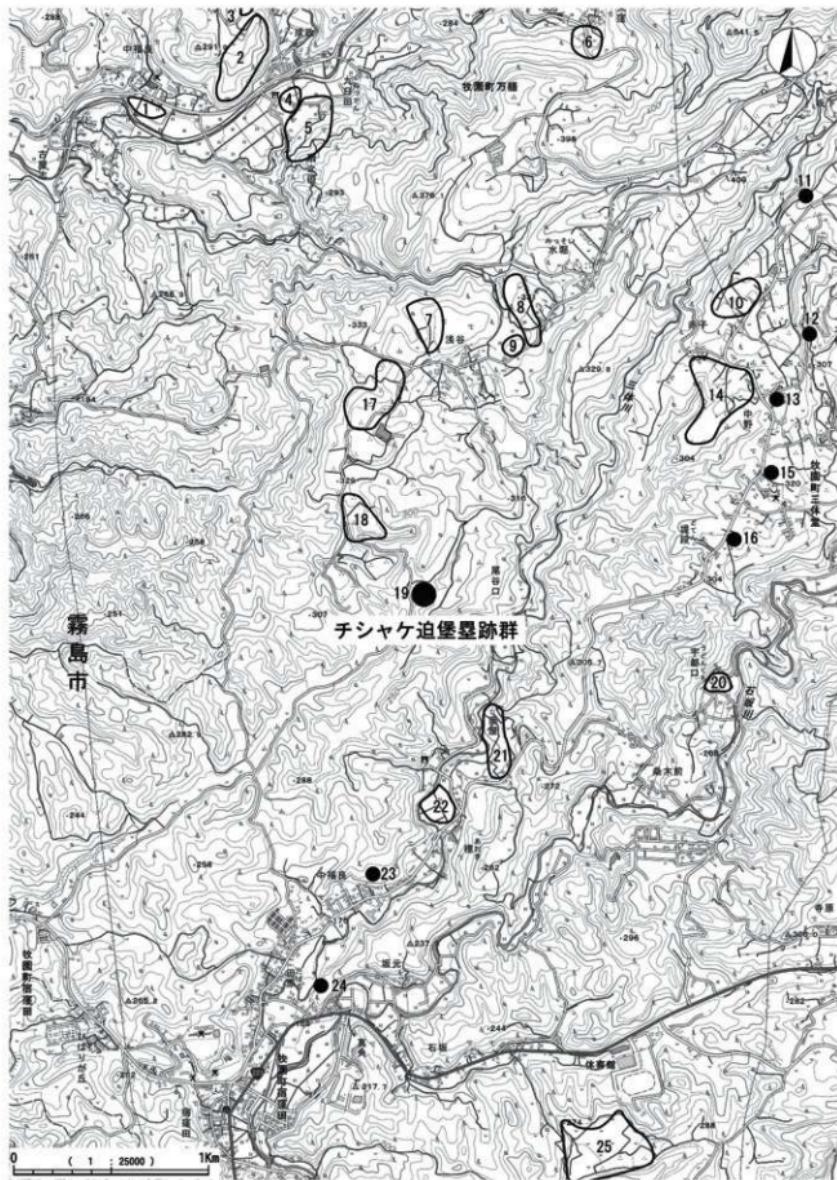
Ref. C09080887600

JACAR（アジア歴史資料センター）『日記イ第24号明治10年7月1日～10年9月29日（防衛省防衛研究所）』

Ref. C09085247200



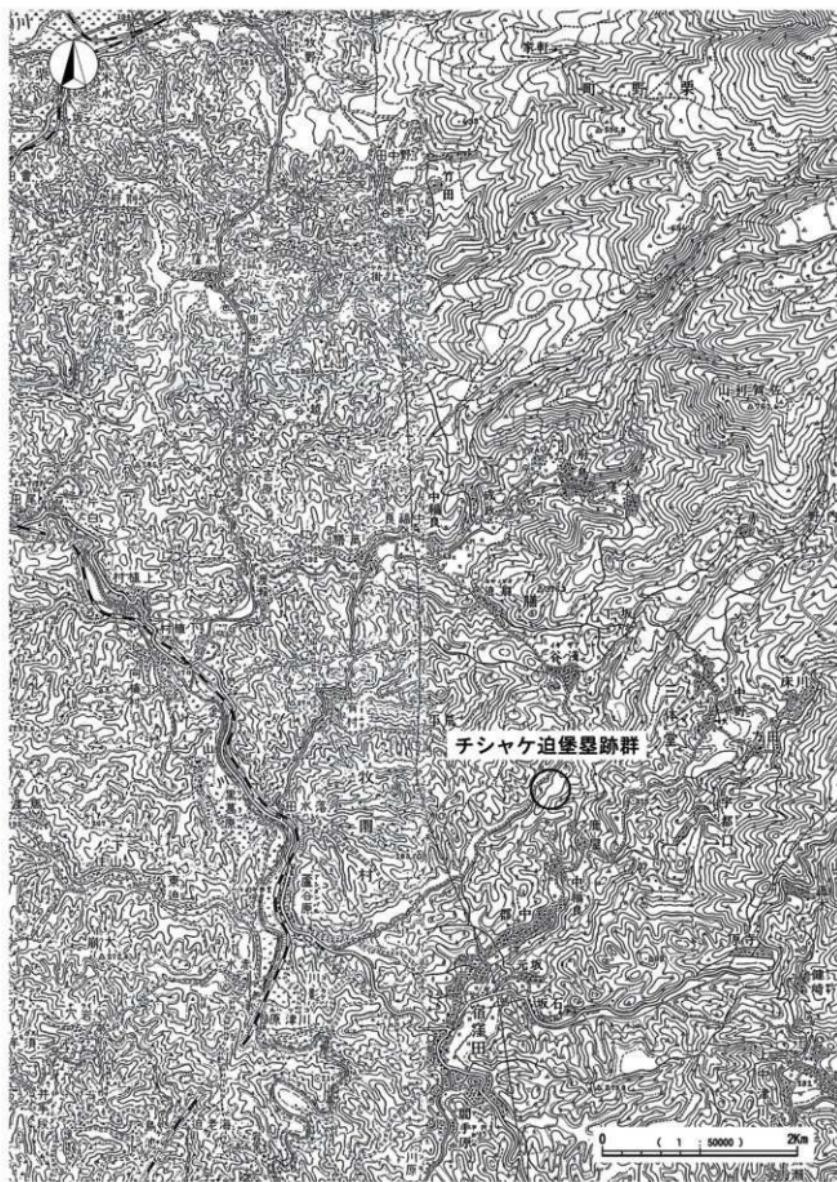
第47図 西郷隆盛宿営地之跡



第48図 チシャケ迫堡跡群 周辺遺跡位置図 (国土地理院 1:25,000 地形図『横川』『霧島温泉』改変)

第16表 チシャケ追堡跡群 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	遺跡台帳番号	所在地	地形	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	近代	備考
1	中福良	218	269	霧島市牧園町万勝	沖積地	●	●	●					牧園町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
2	成政A	218	236	霧島市牧園町万勝成政	山地			●					『国分・隼人テクノボリス建設地区埋蔵文化財分布調査報告書』県埋文報(37)
3	成政B	218	279	霧島市牧園町万勝成政	山地		●	●					
4	九日田	218	270	霧島市牧園町万勝九日田	丘陵	●							牧園町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)(5)
5	宮園原	218	238	霧島市牧園町万勝宮園原	台地	●		●					『国分・隼人テクノボリス建設地区埋蔵文化財分布調査報告書』県埋文報(37)
6	前平	218	239	霧島市牧園町万勝前平	台地			●					『国分・隼人テクノボリス建設地区埋蔵文化財分布調査報告書』県埋文報(37)
7	浅谷A	218	241	霧島市牧園町万勝浅谷	台地		●						『国分・隼人テクノボリス建設地区埋蔵文化財分布調査報告書』県埋文報(37)
8	吉屋志	218	240	霧島市牧園町万勝吉屋志・毛桂	台地		●	●	●	●			『国分・隼人テクノボリス建設地区埋蔵文化財分布調査報告書』県埋文報(37)
9	浅谷B	218	271	霧島市牧園町万勝浅谷	丘陵		●	●	●				1990年農政分布調査
10	赤子II	218	283	霧島市牧園町三体堂赤子	平地	●		●					『国分・隼人テクノボリス建設地区埋蔵文化財分布調査報告書』県埋文報(37)
11	赤子I	218	222	霧島市牧園町三体堂赤子	平地		●						『鹿児島県市町村別遺跡地名表』県埋文報(36)
12	一本松	218	220	霧島市牧園町三体堂一本松	平地	●							『鹿児島県市町村別遺跡地名表』県埋文報(36)
13	中野I	218	219	霧島市牧園町三体堂中野	平地	●							『鹿児島県市町村別遺跡地名表』県埋文報(36)
14	池ヶ谷	218	244	霧島市牧園町三体堂池ヶ谷	台地		●						『国分・隼人テクノボリス建設地区埋蔵文化財分布調査報告書』県埋文報(37)
15	中野古墳	218	227	霧島市牧園町三体堂中野	平地		●						『鹿児島県市町村別遺跡地名表』県埋文報(36)
16	中野II	218	229	霧島市牧園町宇都口	台地		●						『鹿児島県市町村別遺跡地名表』県埋文報(36)
17	供養塚	218	242	霧島市牧園町万勝供養塚	台地	●		●					『国分・隼人テクノボリス建設地区埋蔵文化財分布調査報告書』県埋文報(37)
18	梶の場	218	243	霧島市牧園町三体堂梶の場	台地		●						『国分・隼人テクノボリス建設地区埋蔵文化財分布調査報告書』県埋文報(37)
19	チシャケ追 堡跡群	218	533	霧島市牧園町三体堂チシャケ追	山地						●	本報告書	
20	宇都口	218	27	霧島市牧園町三体堂宇都口	台地			●					
21	井手ヶ原	218	237	霧島市牧園町三体堂			●		●				
22	音川前	218	277	霧島市牧園町音川前	台地			●					
23	ソガドン墓	218	234	霧島市牧園町三体堂索ヶ平	山地				●				昭和52年4月15日指定(市指定史跡)
24	宿窪田坂元	218	230	牧園町宿窪田坂元	山地				●				『鹿児島県の中世城郭跡』県埋文報(43)
25	弓張	218	245	霧島市牧園町宿窪田弓張木	丘陵			●	●	●			『国分・隼人テクノボリス建設地区埋蔵文化財分布調査報告書』県埋文報(37)



第49図 明治35年 チシャケ迫堡塁跡群周辺地形図 (1:50,000・『栗野』『霧島山』改変)

第2節 調査の方法

1 発掘調査の方法

チヤケ迫堡壘跡群の調査は、第50図に示す調査地點を中心（約5,000 m²）を調査対象とした。なお、当該調査地は私有地だったため、土地所有者の承諾を得て、調査を行った。

現地踏査や、霧島市教育委員会との協議、高橋信武氏（日本考古学協会員）の調査方法に関する指導や手嶋正次氏の調査報告書などから、調査目的を7基の堡壘跡の精査と構造解明のためのトレンチ調査、周辺地形と堡壘配置の検討、銃弾などの遺物の検出に設定した。

遺構配置図の作成にあたっては、世界測地系による3級基準点を設置した。遺構配置図及びトレンチ位置等は、トータルステーションと平板による実測を行った。なお、基準点設置業務は委託して行い、基準点等のデーター式は埋文センターに保管してある。

調査に際しては、まず竹や樹木の伐採、倒木や枯れ葉

の除去等を行い、堡壘跡の残存状況を確認した。その後、当時の銃弾があることを想定して、調査区全体に金属探知機による調査を行い、反応のあった部分を掘り下げ、銃弾等の遺物の検出に努めた。

堡壘の調査にあたっては、まず銃弾等の発見のため、金属探知機による調査を実施した。遺構の保護を図るために、トレンチ以外の部分は、伐採や清掃のみとした。

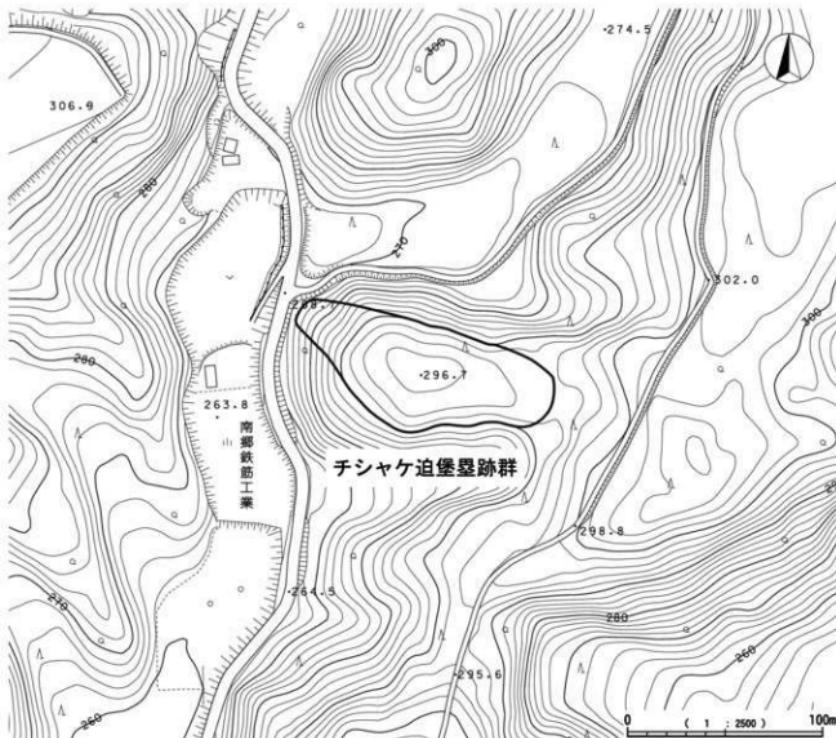
2 整理作業の方法

遺物は出土しなかつたため、遺構図の整理や文献の把握・内容確認等を中心に行なった。

第3節 層序及び堡壘

本遺跡の層序は、トレンチを設定した堡壘ごとで異なっている。そのため、各堡壘跡実測図で記述する。

堡壘の各部位名称及び計測箇所については、第4章第3節にある第30図のとおりである。なお、各堡壘平面図は表土での現況図である。



第50図 チヤケ迫堡壘跡群 遺跡範囲図（詳細）

第4節 チャケ迫堡星跡群の調査成果

堡星の調査は、清掃を行った後、現況測量を行い、規模や特徴を調査・記録することとした。

堡星は、地形の傾斜や凹みの可能性も含まれるものもあるため、多くの堡星でトレーニングを行った。

調査区全体に金属探知機による調査を行ったが、銃弾等の遺物の出土はなかった。

堡星の配置状況と各堡星毎に詳述していきたい。

1 堡星の配置について

西郷軍の陣地の1つであるチャケ迫堡星群は、独立した丘陵で標高約296mにある。北・南・西側は、急峻な地形をしており、容易に近づくことはできない。

丘陵には、3基の半円形堡星と4基のタコツボ形堡星が構築されている。各堡星は単体で構築されているが、7基で1つの陣地を形成している。主に北側にある万勝地区から南下してくる政府軍に対する目的で構築された堡星群と考えられる。

3基の半円形堡星（堡星1・3・4号）は、北側を警戒して構築されており、現在の市道浅谷線（標高約268m）を見下ろす位置にある。現在は杉の植林によって、遠視ができないが、当時は薪にするなどの木材利用が活発なため、高い木々もなく、遠くまで見渡せたようである。また、比高差があり、市道からは堡星群を確認できなくなつたため、待ち伏せには絶好の丘陵である。

4基のタコツボ形堡星のうち3基（堡星2・5・6号）は、南側斜面に構築されている。それぞれ半円形堡星の中間に、後方に構築されており、相互に関係性をもつていている。1基（堡星7号）は、離れた斜面に構築されている。各堡星の死角となる場所で、西側斜面から進攻してくる政府軍を低い位置から警戒するには適しているが、他の堡星と比高差約15mあり、離れ過ぎていて独立している。この1基については、調査期間の関係で、トレーニングを行っていない。そのため、自然地形の可能性もある。

2 堡星の調査について

（1）堡星1号（第52図）

丘陵の尾根の一一番東に位置している半円形堡星である。

現況計測値は、全長620cm、最大幅596cmで、胸壁の厚さ340cm、高さ80cmである。土坑は不定形で、一段低い土坑がもう1つあり、260×184cmの楕円形である。深さは20～40cmである。

A-A' と B-B' に幅50cmのトレーニングを設定して、堡星の下層調査を行った。A-A' 方向のトレーニングは、胸壁を掘り下げて、構造の調査も行った。

堡星は表土（腐植土）と堡星廃棄後に流入した土に、胸壁で80cm、土坑で30～50cm覆われている（埋土1・2）。胸壁上層はシラスが主体で、黒褐色土が混じる構築土（埋土2）である。下層は黒褐色土で基礎を構築している。堡星1号の埋土4と同一である。どちらもしまりがなく、礫や人工物などの混じりはなかった。堡星構築面は、固い地盤であるシラスの面である。また、土坑を掘り上げた土で胸壁を構築したと考えられる。

表土（埋土3）で構築されている。下層は黒褐色土（埋土4）で基礎を構築している。どちらもしまりがなく、礫や人工物などの混じりはなかった。さらに掘り下げると固い地盤であるシラスの層となる。土坑を掘り上げた土で胸壁を構築したと考えられる。

土坑と胸壁の境には、ステップ状の段がある。表土で観察された一段低い楕円形土坑は、堡星構築面でも一段低くなっている。土坑床面は、地盤のシラスを掘り込み構築している。

堡星北側は、杉の伐採により一部削平を受けている。

（2）堡星2号（第53図）

丘陵の尾根の東に位置しているタコツボ形堡星である。

堡星1号と堡星3号の中間地点にあり、北側急崖下の道から反対に位置している。そのため、北側の道を監視することはできない。

形状は楕円形で、表土での計測値は、長軸264cm、短軸184cm、深さ20cmである。長軸は東西方向である。胸壁は伴わない構造である。

凹みが浅かつたため、自然地形の可能性を考えて、A-A' と B-B' に幅50cmのトレーニングを設定して、堡星の下層調査を行った。

堡星は表土（腐植土）と堡星廃棄後に流入した土に、30cm程度覆われている（埋土1・2）。それを取り除くと一段掘り下げた掘り込みを検出した。構築当時の深さは40cmである。形状については、表土上面と変わらない。床面は、A-A' に約164cm、B-B' 84cmの平坦面を確認した。床面は、地盤のシラスを掘り込み構築している。

（3）堡星3号（第54図）

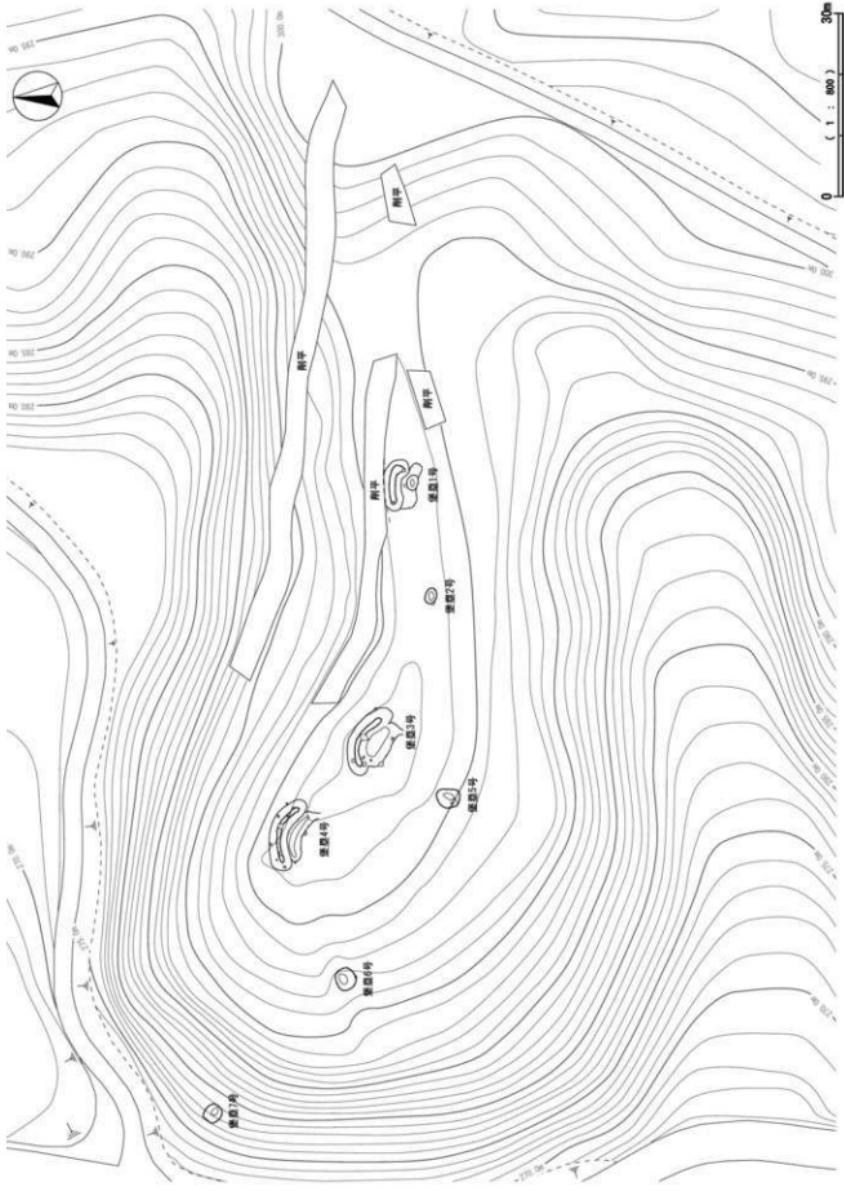
丘陵の尾根から少し開けた頂部平坦地の入口に位置している半円形堡星である。高熊山激戦地跡とチャケ迫堡星跡群の堡星の中では、最大の堡星である。

現況計測値は、全長1170cm、幅672cmで、胸壁の厚さ250cm、高さ72cmである。土坑は他の堡星よりも大きく、全長800cm、幅400cm、深さは72cmである。

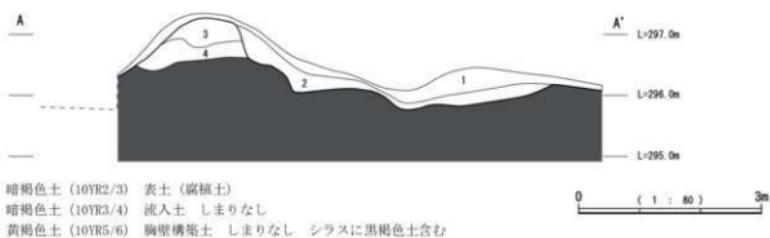
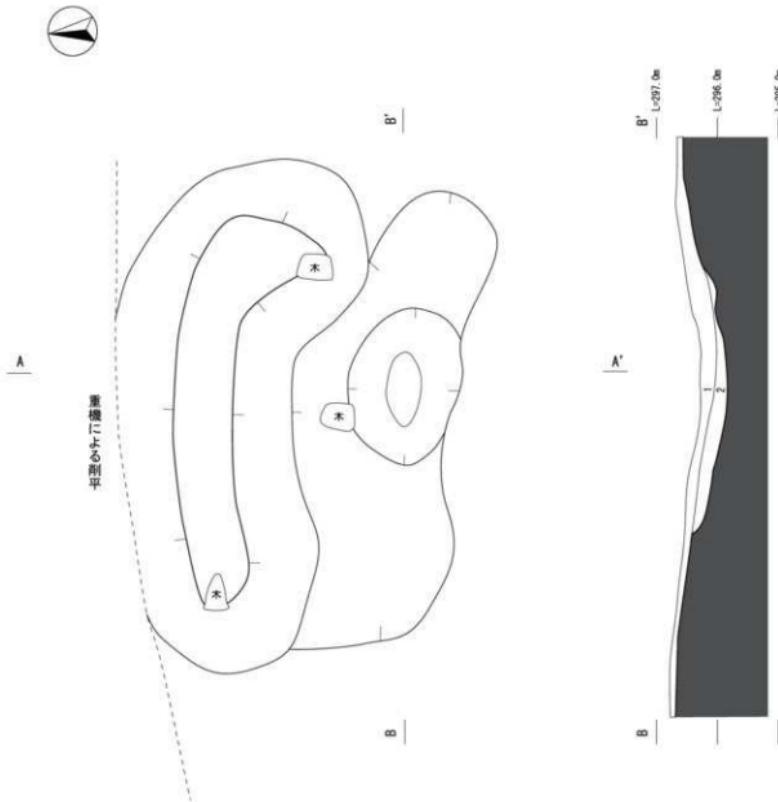
A-A' 方向に幅50cmのトレーニングを設定して、胸壁と土坑の構造調査を行った。胸壁は一部削削を行い、構築埋土の確認を行った。

堡星は、表土（腐植土）に覆われている（埋土1）。他の堡星で見られた流入土は見られなかった。胸壁上層はシラスが主体で、黒褐色土が混じる構築土（埋土2）である。下層は黒褐色土で基礎を構築している。堡星1号の埋土4と同一である。どちらもしまりがなく、礫や人工物などの混じりはなかった。堡星構築面は、固い地盤であるシラスの面である。また、土坑を掘り上げた土で胸壁を構築したと考えられる。

土坑と胸壁の境には、ステップ状の段があることが確認できた。



第 51 図 チャケ泊蜜羣道標面図



第52図 チシャケ追堡跡群 堡壘1号実測図

(4) 堡塁4号（第55図）

丘陵の頂部平坦地の一番西に位置する半円形堡塁である。全長と最大の長さである。調査期間等の関係で、トレンチ調査は行っていない。

現況計測値は、全長1208cm、幅550cmで、胸壁の厚さ300cm、高さ70cmである。土坑は細長く、胸壁に沿っており、深さは70cmである。

胸壁表面に礫等の配置は見られないことから、堡塁1号や堡塁3号と同一の構造と推定される。

(5) 堡塁5号（第56図）

丘陵の頂部平坦地の南側に位置するタコツボ形堡塁である。堡塁1・3・4号が展開する頂部平坦地から急な斜面に下りる際の一段下がった緩やかな斜面に位置している。凹みが浅かったため、自然地形の可能性を考え、A-A'・B-B'に幅50cmのトレンチを設定して、堡塁の下層調査を行った。

不定形で、現況計測値は長軸・短軸とも360cmである。深さは、北東斜面からだと約80cm、南西斜面からだと約10cmである。

トレンチ調査の結果、北東側斜面から約90cm、南西斜面から約40cm掘り込みを検出した。床面はA-A'に約250cm、B-B'に約200cmあり、地盤のシラスを掘り込み構築している。

表土（腐植土：埋土1）に約30cm覆われておらず、さらに約20cmの褐色土（埋土2）が流れ込んでいる。流れ込んだ土は、しまりのないシラスで、堡塁部分に厚く堆積している。

(6) 堡塁6号（第57図）

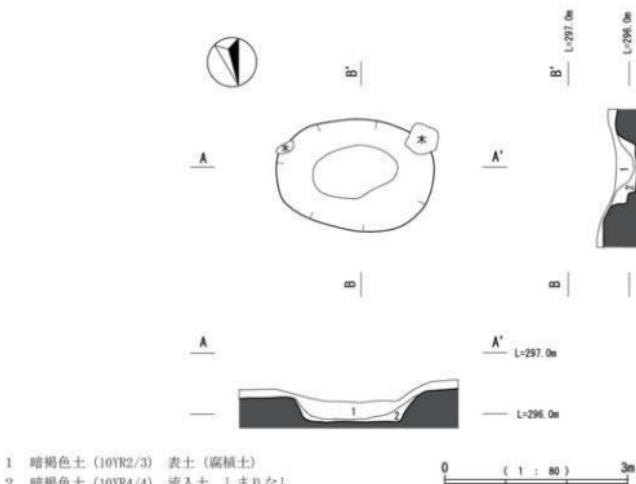
丘陵の比較的緩やかな南西斜面に位置するタコツボ形堡塁である。丘陵の頂部平坦地より、400cmほど低い位置にあり、斜面の比較的緩やかな部分の平坦地に堡塁を構築している。

凹みが明瞭でなく、自然地形の可能性を考えて、A-A'・B-B'に幅50cmのトレンチを設定して、堡塁の下層調査を行った。

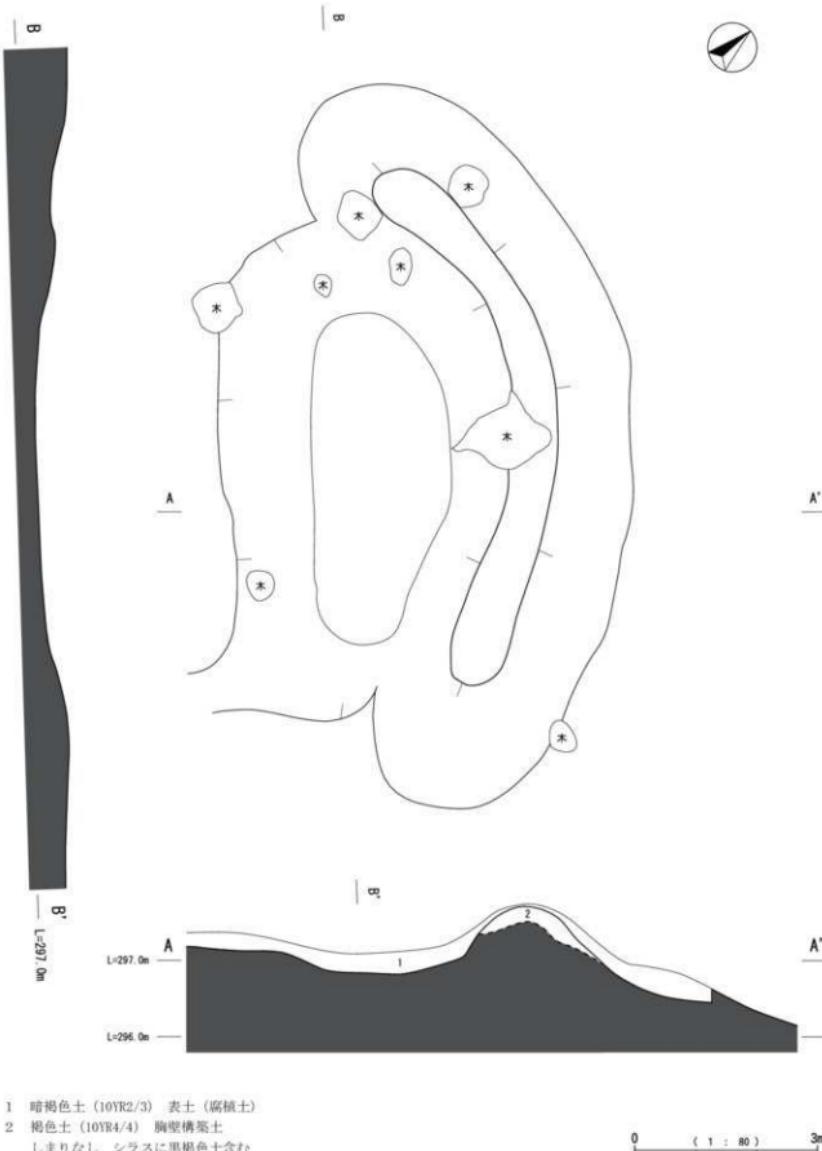
梢円形で、現況計測値は、長軸354cm、短軸326cm、深さは東斜面からだと約100cm、南北斜面からだと約50cmである。

トレンチ調査の結果、南北斜面から約70cm、標高が低くなる西斜面からでも20cm地盤のシラスを掘り込んでいる。床面は東方向に緩やかに上がりながら、A-A'に約150cm、B-B'に約100cmの平坦面確認した。

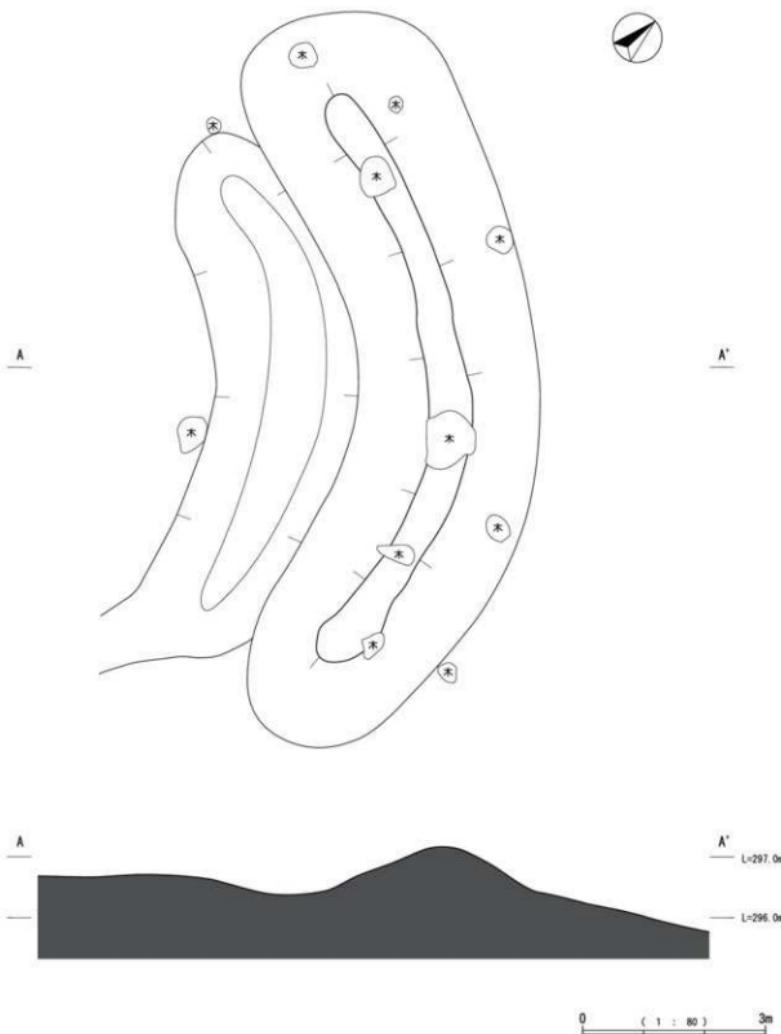
表土（腐植土：埋土1）に覆われている。その下層は、シラスを由来とした流入した土である（埋土2・3・4）。堡塁廃棄後に周辺の地盤が崩れて流れ込んだものと推定される。



第53図 チシャケ追堡塁跡群 堡塁2号実測図



第 54 図 チシャケ追堡跡群 堡壘 3 号実測図



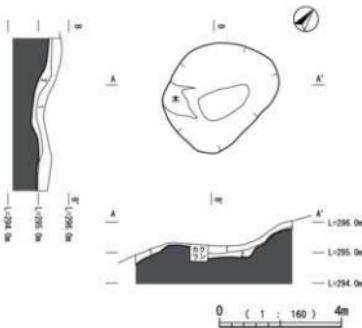
第55図 チヤケ追堡跡群 堡壘4号実測図

(7) 堡塁7号(第58図)

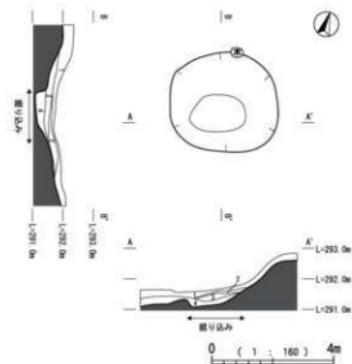
丘陵斜面部の踏査を行った結果、丘陵西側の急斜面にタコツボ形堡塁の可能性がある跡みを発見した。

丘陵頂部から約15m下った斜面にあり、頂部の堡塁群からは死角となる部分に構築されている。直下には、現在の市道高野線を見る事ができる位置にある。調査期間の関係で、トレンチ調査は行っていないため、自然地形の可能性もある。

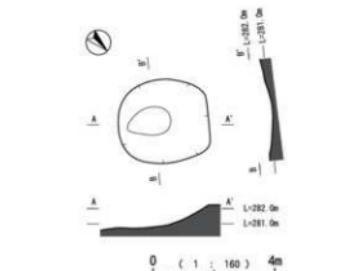
梢円形で、現況計測値は、長軸296cm、短軸275cmである。深さは北西斜面からは72cm、他の斜面からだと40cmである。



1 暗褐色土 (10YR2/3) 表土 (腐植土)
2 黄褐色土 (10YR5/6) 流入土 しまりなし
第56図 チヤケ追堡塁跡群 堡塁7号実測図



1 暗褐色土 (10YR2/3) 表土 (腐植土)
2 黄褐色土 (10YR5/6) 流入土 しまりなし
3 明黄褐色土 (10YR7/6) 流入土 しまりなし
1~2mmの輕石を5%含
4 深灰色土 (10YR4/1) 流入土 しまりなし
第57図 チヤケ追堡塁跡群 堡塁6号実測図



第58図 チヤケ追堡塁跡群 堡塁7号実測図

第17表 チヤケ追堡塁跡群 堡塁観察表

単位(cm)

堡塁名	分類	全長方向	全長	幅方向	最大幅	胸壁の厚さ	胸壁高さ
堡塁1	半円形	東西	620	南北	596	340	80
堡塁3	半円形	北西-南東	1170	北東-南西	672	250	72
堡塁4	半円形	北西-南東	1208	北東-南西	550	300	70

単位(cm)

堡塁名	分類	長軸方向	長軸	短軸方向	短軸
堡塁2	タコツボ形	東西	264	南北	184
堡塁5	タコツボ形	北東-南西	360	北西-南東	360
堡塁6	タコツボ形	東西	354	南北	326
堡塁7	タコツボ形	北西-南東	296	北東-南西	275

岩川官軍墓地

第6章 岩川官軍墓地と関連遺跡（薩軍の墓）

第1節 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

岩川官軍墓地は、曾於市大隅町岩川に所在する。

曾於市は、鹿児島県の東部、大隅半島の北部に位置し、東側で宮崎県都城市、南側で志布志市・曾於郡大崎町、南西側で鹿屋市、北西側で霧島市の4市1町と接している。市の面積は390.14 m²で、鹿児島県の総面積の4.3%を占めている。平成17（2005）年に財部町・末吉町・大隅町が合併し、曾於市となった。

曾於市のうち大隅町の地形は、東西に狭長で北部高地に端を発する前川、後川、月野川の3つの川がそれぞれ町内の東部、中部の波状型の間地を隨所に貫流して、東南に向かい、志布志湾に注ぐ菱田川に合流する。

岩川官軍墓地が所在する岩川地区は、曾於市の南部にあたり、西部の牧ノ原台地から東部の岩川低地に漸移する標高200 m ~ 300 m の丘陵性台地が卓越する地域である。さらに、この丘陵性台地は、大淀川水系と菱田川水系に属する諸河川により浸食を受け、小台地群に分断されている。

2 歴史的環境

埋蔵文化財包蔵地は、大隅町が267か所、財部町が126か所、末吉町が187か所（令和2年8月）と数多く周知されている。

曾於市大隅町における発掘調査は、昭和31（1956）年に同志社大学の酒詰伸男博士が行った上八合遺跡の調査が最初で、縄文時代の遺物が出土したといわれている。その後、本格的な発掘調査は長く行われなかつたが、平成4（1992）年から大隅町教育委員会によって、農業基盤整備等に伴い本格的な発掘調査が行われ、数多くの貴重な資料が出土している。平成11（1999）年には鹿児島県教育委員会によって、県道改良事業に伴う出水平遠跡や、その後の東九州自動車道建設に伴う定塚遺跡など多くの大規模な発掘調査が始まり、歴史的環境の様相が次第に明らかとなりつつある。以下に、曾於市全域の時代ごとの概要について述べる。

旧石器時代

耳取遺跡・桐木遺跡・桐木B遺跡・閑山遺跡・建山遺跡・定塚遺跡等多くの遺構・遺物が発見されている。耳取・桐木遺跡では、ナイフ形石器文化期から細石刃文化期に到る礫群や石器製作跡等の遺構が多く検出され、ナイフ形石器・台形石器・剥片尖頭器・細石核・細石刃等の遺物が多く出土している。特筆すべきは、耳取遺跡で日本最古の石剣（耳取ヴィーナス）が出土していることである。この耳取ヴィーナスを含む203点が、平成19（2007）年に県の有形文化財（考古資料）として指定されている。建山遺跡では2時期のナイフ形石器文化期

と細石刃文化期の存在が確認され、細石刃文化期に西北九州からの移動もしくは交流を裏付ける資料や細石刃の線状痕の観察から細石刃の機能、使用方法について再考を促す資料等が出土している。

縄文時代

草創期では数は少ないが、桐木遺跡で集石遺構が検出され、隆起線文土器や石鏡が出土している。

早期では、定塚遺跡で竪穴状遺構97基をはじめ、集石遺構や連穴土坑等多くの遺構が検出され、草創期と早期前葉をつなぐ時期の集落として貴重な遺跡である。閑山遺跡では、地形に沿って計画的に配置されていたことがうかがえる19基の落とし穴群が検出されている。また、赤色顔料が詰まった変形攢糸文土器が、入れ子状で出土している。

前期では、定塚遺跡や稻村遺跡で森式土器が出土している。中期では桐木遺跡で船元式土器や在地の尖底条痕文土器群・石鏡・石匙が多く出土し、閑山遺跡・唐尾遺跡・高古塚遺跡などの遺跡で落とし穴が、小倉前遺跡・チャヤノ木遺跡では土坑が検出されている。

後期の遺跡はそれほど多くないが、丸尾遺跡は丸尾式土器の標式遺跡である。また、中岳洞穴は後期後葉の中岳式の標式遺跡として有名である。

晩期の遺跡は各地にあるが、桐木遺跡で入佐式・黒川式土器に伴う5軒の竪穴住居跡や掘立柱建物跡・土坑が、唐尾遺跡で黒川式土器に伴う1軒の竪穴住居跡が検出されている。遺物としては、上中段遺跡で夜白式土器の土器に丹塗り壺や初痕土器などが含まれ、この時期の稻作の可能性を示す遺跡として注目されている。また、楠木岡遺跡では、日常品の鉢形土器が縄文時代晩期、壺形土器が弥生時代の形態を導入するという状況が見られ、注目されている。

弥生時代・古墳時代

弥生時代・古墳時代の遺跡は少なく、閑山西遺跡・打ち込遺跡・吹切段II遺跡などが挙げられるが、詳細は不明である。

古代

高峯遺跡・躰場遺跡といった都城盆地に近い遺跡で掘立柱建物跡などが検出されている。中尾立遺跡・唐尾遺跡・建山遺跡・狩俣遺跡・高古塚遺跡などで掘立柱建物跡や焼土跡などが検出され、墨書き土器も出土している。上中段遺跡では墨書き土器や焼塙土器などとともに、輪の羽口や铁津・铁製品など製鐵関係の遺物が多く出ている。

中世・近世

恒吉城は中世の山城跡で、築城年は不明である。大きく3つの城から成り、日輪城、東高城、西高城と呼ばれ、その総称が恒吉城である。城内には、曲輪、土壁、空堀、

虎口、敵状態埋群が良好な状態で残存しており、戦国期末期の南九州型と呼ばれる群郭型の城郭の姿を色濃く残している。旧大隅町の時から、保存整備事業を行っており、周辺の麓や御仮屋跡推定地などの調査も行っている。また、曾於市内には龍虎城跡、末吉城跡も残り、平行して調査・研究が行われている。その他では、桐木遺跡・建山遺跡で中世の道跡が、狩俣遺跡で中世の畠跡や溝状遺構が検出されている。

3 岩川官軍墓地及び薩軍の墓 概略

曾於市と西南戦争

大隅半島では、明治 10 (1877) 年 6 月末から 7 月 24 日に都城が陥落するまでに、西郷軍と政府軍の間で、激しい戦いが繰り広げられている。

西郷軍（中島健彦、貴島清率いる振武隊が中心）は、恒吉（曾於市大隅町）を拠点に、7 月 8 日に百引と市成（現：鹿屋市輝北町）の境で、政府軍との激戦に勝利した。西郷軍は、7 月 10 日に月野（曾於市大隅町）に進出してきた政府軍を撃退したが、11 日には西方荒佐野（大崎町）付近の戦闘で敗退している。なお、7 月 8 日から 11 日にかけて、西郷軍の戦死者 15 名は恒吉に仮埋葬されたと言われている。7 月 12 日には大崎で戦闘があり、西郷軍は勝利したが、13 日頃から末吉方面へ退去を始めている。

政府軍は 7 月 18 日から 19 日にかけ、大挙して財部に進入し、7 月 22 日に財部・通山（曾於市財部町）・岩川へ進出する。これに対して、西郷軍は 7 月 23 日に笠木（曾於市大隅町）・岩川陣の政府軍を攻撃するが、末吉へ退いている。政府軍は、7 月 24 日岩川麓・末吉麓や通山方面へ追撃を行い、西郷軍（振武隊）は破れ、都城へ入っている。その都城では、西郷軍は抵抗する力も無くすぐに放棄している。

一連の戦闘により、地元住民は西郷軍あるいは政府軍への物資の調達や動員等に苦慮していたようである。

岩川官軍墓地

岩川官軍墓地は、「大隅弥五郎伝説の里」の北側にある岩川・馬場集落墓地内に位置している。現在 79 基の墓石があるが、昭和 8 (1933) 年の略配置図（第 67 図）によると、86 基余りの墓石が記録されている。なお、墓石の石材は熊本県天草の下浦石（砂岩製）で、熊本県の官軍墓地をはじめ、多くの官軍墓地で使用される石材である。

昭和 42 (1967) 年 7 月には、斜面が崩れ、土砂が流れ込む等した。そこで、地元商工会議所が中心となり、墓石周辺が掘り出され、墓地の周間にブロック塀を巡らし、入口もコンクリートで固め、献灯も 2 つ設けられた。

当地に葬られている兵士は、主に百引・大崎・岩川で戦死した者や、都城の病院で病死した者と刻字されており、特に激戦であった百引での戦死者が多い。一番位の高い人物は、陸軍大尉の山形照方、次に少尉の奥田政実、

少尉補の林為隆、以下軍曹、伍長、兵卒、馴卒、軍夫と続いている。戦死者の出身地は、仙台、東京、名古屋、大阪、広島の各鎮台から派遣されているので、全国各地に及んでいる。また、以前は犬の墓もあったと伝承されている（大隅町誌編纂委員会 1990）。

『大隅町誌』によると、埋葬までの流れは、まず大崎假宿、野方荒佐野、百引の激戦地から死体を運び、いつたん現在の墓地北側の空き地あたりに大きな穴を掘り、そこに仮埋葬した。その後に、官軍墓地の造営に合わせて、現在の場所に移したようである。埋葬形態については、火葬と土葬の両方の記述が残る。

なお、現地踏査や、曾於市教育委員会、『大隅町誌』、馬場墓地管理者への聞き取りなどから、昭和 8 年頃から昭和 42 年までの間に、官軍墓地のある馬場墓地の整備を度々行っていることが判明した。最近では平成 25 年に、縁石の整備と破損した墓石の接合を行っている。

薩軍の墓

岩川官軍墓地から菱田川を挟み、東に 1.5 km ほどの曾於市末吉町岩崎の台地先端部に、ひっそりと 1 基だけ薩軍の墓が所在している。マウンド状の墓の上に自然石が建ててあるだけで刻字はない。7 月下旬の岩崎周辺の戦闘で戦死した西郷軍の兵士が葬られたと言われているが、史料もなく、実際に誰が葬られたのかは不明である。

その他、曾於市では、約 1 か月に渡り、戦闘が行われたため、大隅町坂元の皆越台場跡（第 59 図）など、西南戦争関連の古戦場跡や史跡・史料など数多く残っている。

【引用・参考文献】

- 大隅町誌編纂委員会（編） 1990『大隅町誌』（改訂版）
末吉町郷土史編纂委員会（編） 1987『末吉郷土史』（第 3 版）
曾於市教育委員会 2017「曾於市内の西南戦争関連の文化財・史跡について」『岩川官軍墓地・薩軍の墓慰靈祭資料』
曾於市教育委員会『曾於市の幕末・明治維新・西南戦争関連史跡ガイドマップ』
鹿児島県埋蔵文化財センター 2009『定塚遺跡・福村遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（153）



第 59 図 皆越台場跡（曾於市大隅町坂元）



第60図 岩川官軍基地周辺遺跡位置図（国土地理院1：25,000『岩川』『末吉』『大岡松山』『野方』改変）

第18表 岩川官軍墓地 周辺遺跡地名表（1）

番号	道路名	道路台帳番号	所在地	地形	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	近代	備考
1	般久保	217	226	曾於市大隅町笠木	台地	●							大隅町埋蔵文化財発掘調査報告書（15）
2	境ヶ尾	217	577	曾於市大隅町中之内境ヶ尾	一	●							
3	三反ヶ丸	217	209	曾於市大隅町中之内三反ヶ丸	丘陵			●					
4	岩北城跡	217	533	曾於市末吉町岩北内壁	台地				●				『鹿児島県の中世城館跡』県埋文報（43）
5	土成城跡	217	172	曾於市大隅町中之内土成屋敷	丘陵				●	●			『鹿児島県の中世城館跡』県埋文報（43）
6	片水段	217	149	曾於市大隅町中之内片水段	丘陵	●			●	●			『鹿児島県の中世城館跡』県埋文報（43） 大隅町埋蔵文化財発掘調査報告書（44）
7	鶴田I	217	120	曾於市大隅町中之内鶴田	丘陵	●	●	●	●				
8	段	217	3	曾於市大隅町岩川小豆穴・段・赤糸道	台地	●			●	●	●		『大隅地区埋蔵文化材分布調査概報』県埋文報（29）
9	上松田	217	150	曾於市大隅町中之内上松田	平地	●			●	●	●		
10	城ヶ迫	217	80	曾於市大隅町中之内	丘陵	●							
11	新城跡	217	170	曾於市大隅町中之内城之山・城追	丘陵			●	●	●			
12	追田	217	78	曾於市大隅町中之内追田	丘陵	●							
13	中追I	217	158	曾於市大隅町岩川中追	丘陵			●	●	●			
14	中追II	217	45	曾於市大隅町岩川中追	丘陵	●			●	●	●		大隅町埋蔵文化財発掘調査報告書（39）
15	池ノ段	217	64	曾於市大隅町岩川池ノ段	丘陵	●							
16	所追	217	46	曾於市大隅町岩川所追	丘陵	●							『大隅地区埋蔵文化材分布調査概報』 県埋文報（29）
17	竹下谷	217	53	曾於市大隅町岩川竹下谷	丘陵	●							
18	上河原	217	159	曾於市大隅町岩川上河原	丘陵	●			●				
19	諫訪迫	217	5	曾於市大隅町岩川諫訪迫	丘陵	●							
20	永堆谷	217	6	曾於市大隅町岩川永堆谷	丘陵	●							『大隅地区埋蔵文化材分布調査概報』県埋文報（29）
21	西之園	217	134	曾於市大隅町岩川西之園	丘陵	●		●	●	●			大隅町埋蔵文化財発掘調査報告書（29）
22	馬場城跡	217	169	曾於市大隅町岩川上馬場	丘陵				●	●			
23	元屋敷	217	151	曾於市大隅町中之内元屋敷	平地	●	●		●	●	●		大隅町埋蔵文化財発掘調査報告書（5）（39）
24	中馬場通	217	126	曾於市大隅町岩川中馬場	丘陵		●		●	●	●		『大隅地区埋蔵文化材分布調査概報』 県埋文報（29）
25	岩川官軍墓地	-	-	曾於市大隅町岩川	傾斜地						●	本報告書	
26	西南の役 薩軍の墓	-	-	曾於市末吉町薩崎	丘陵						●	本報告書	
27	鳴神	217	105	曾於市前田鳴神	台地	●			●	●	●		大隅町埋蔵文化財発掘調査報告書（1）（3）（4） 曾於市埋蔵文化財発掘調査報告書（7）
28	三才掘	217	235	曾於市大隅町岩川八合原	台地	●							

第19表 岩川官軍墓地 周辺遺跡地名表（2）

番号	遺跡名	遺跡台帳番号	所在地	地形	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	近代	備考
29	西大久保	217	217 曾於市大隅町丹野西大久保	台地			●						
30	渡ヶ迫平	217	220 曾於市大隅町岩川	丘陵		●							
31	東馬場	217	32 曾於市大隅町岩川野首・下川路	台地		●		●	●	●			大隅町埋蔵文化財発掘調査報告書(17)
32	チシャノ木	217	258 曾於市大隅町岩川チシャノ木	台地	●	●		●	●	●			鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(125)
33	別府	217	7 曾於市大隅町岩川別府	丘陵		●	●						
34	山下口	217	104 曾於市大隅町月野山下口	台地		●			●				
35	竹山Ⅰ	217	66 野中大久保・十文字	台地		●	●						
36	竹山Ⅱ	217	128 曾於市大隅町月野梶田	台地			●						
37	境木	217	106 曾於市大隅町月野境木	台地		●		●					
38	稻葉崎	217	47 曾於市大隅町月野稻葉崎	台地		●		●	●	●			
39	八合原	217	33 曾於市大隅町月野八合原	台地		●		●	●	●			
40	上八台	217	108 曾於市大隅町月野上八台	台地		●		●					
41	柴立	217	238 曾於市大隅町月野八合原	台地		●							
42	山段	217	107 曾於市大隅町月野山段	台地		●							
43	上長迫	217	215 曾於市大隅町月野	台地		●							
44	馬ノ瀬平	217	207 曾於市大隅町月野	台地		●							
45	堰込	217	208 曾於市大隅町月野	台地		●							
46	岡元城跡	217	196 曾於市大隅町月野岡元	丘陵					●				『鹿児島県の中世城館跡』県理文報(43)
47	飯田Ⅲ	217	65 曾於市大隅町岩川大道	丘陵		●							
48	飯田城跡	217	195 曾於市大隅町岩川宮田他	丘陵					●				『鹿児島県の中世城館跡』県理文報(43)
49	深田	217	84 曾於市大隅町岩川深田・門田	丘陵		●							
50	平木	217	81 曾於市大隅町月野平木	丘陵		●							
51	坂段	217	163 曾於市大隅町月野坂段	丘陵			●	●	●				
52	桟尾田城跡	217	197 曾於市大隅町月野野首	丘陵					●				『鹿児島県の中世城館跡』県理文報(43)
53	坂之上	217	73 曾於市大隅町月野坂之上	台地		●							
54	出水平	217	218 曾於市大隅町月野出水平	台地		●							

第2節 調査の方法

1 発掘調査の方法

岩川官軍墓地の調査は、曾於市が管理している第63国に示す官軍墓地全体（約200 m²）を調査対象とした。文献調査の成果等をもとに、現在の配置と階級ごとの墓石の実測、トレンチ調査を行い、官軍墓地地形造営時の整備面を確認すること、他に墓石が埋没していないかを調査することを目的とした。併せて、埋葬方法の調査も行うこととした。なお、薩軍の墓については、現在私有地であるため、土地所有者の許可を得て、墓石の配置と墓石の実測、写真撮影を行った。

遺構配置図や地形測量の方法は、下記のとおりである。まず、樹木の剪定や草刈りを行い、墓石を洗浄して、墓全体が観察しやすいようにした。並行して、曾於市教育委員会から提供された地図や基準点座標等を利用して、レベル移動を行った。なお、遺構配置図等は主に平板で、地形測量はトータルステーションで測量を行った。

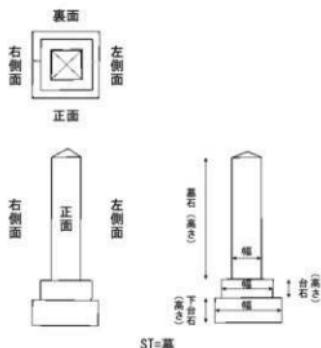
発掘調査の方法は、下記のとおりである。岩川官軍墓地では、墓石の洗浄後、5つの墓石の実測と正面の拓本を行った。その後、トレンチを3ヶ所設定し、人力によつて掘削を行った。官軍墓地造営時に開ける層と後世の造成による層との判別を行い、さらに地山又は遺構と考えられるプランを検出した層まで掘削を行った。遺物は、古銭が3点出土したが、全て後世による造成の層からの出土であったため、一括で取り上げた。調査終了後は、すべてのトレンチの埋め戻しを行った。

薩軍の墓は、掘削を伴う調査は行っていない。

2 整理作業の方法

遺構図等の整理を行い、遺物は、古銭のみの出土のため、クリーニングを行った後に、拓本を行った。

3 墓石部位名称



第 61 図 墓石部位名称及び計測箇所

第3節 層序

岩川官軍墓地の層序は、I層～VI層は、玉砂利やアカホヤ火山灰が混じることや、墓石や縁石の立地層から後世の造成層と考えられる。墓石は、I層とII層の直上にそれぞれに建っているものが確認できた。詳細は、各トレンチで記述する。

IV層はアカホヤ火山灰層で、トレンチ2とトレンチ3の北側で検出した。トレンチ1とトレンチ3の南側では、IV層が削平されている。レベルの検討や層位から、IV層又はV層上面が、官軍墓地造営時の造成面と考える。

第 20 表 岩川官軍墓地 基本層序

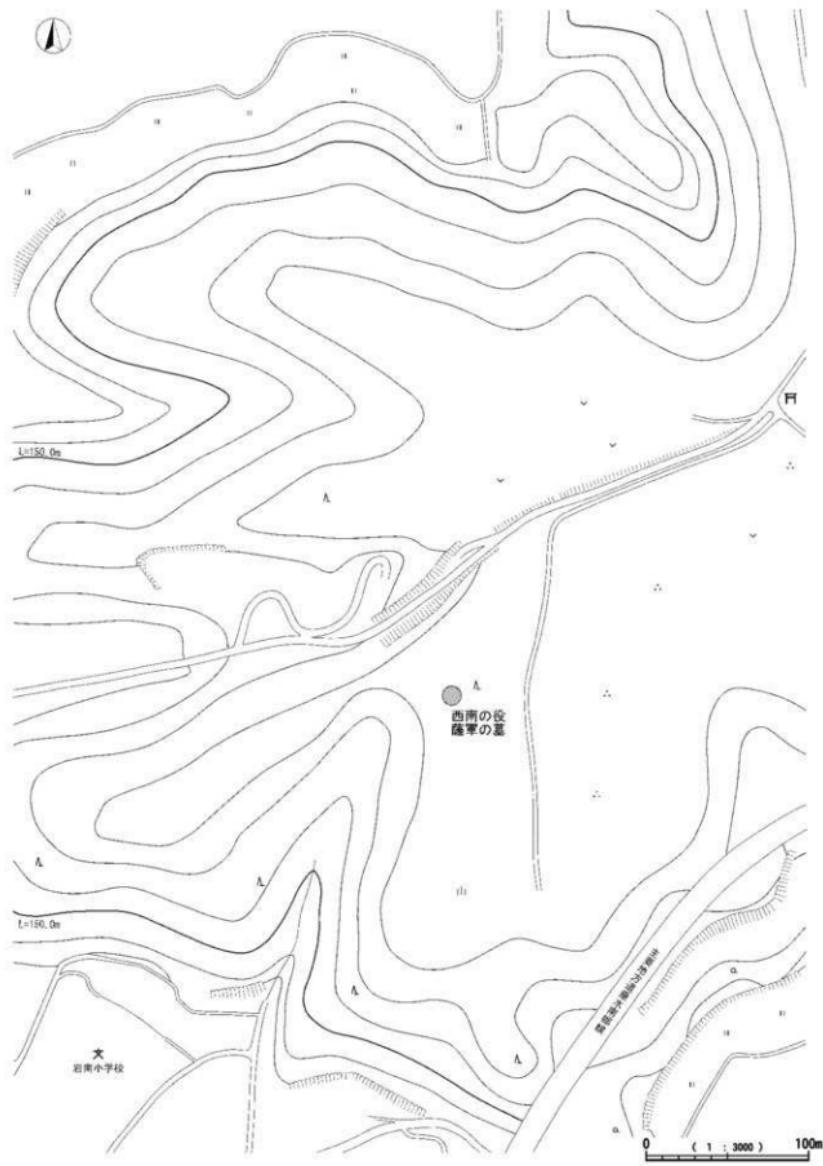
層位	色調など	包含層・テフラ	層厚
I 層	表土 (10YR3/3)	玉砂利の造成層	6 cm
II 層	にじみ、黄褐色土 (10YR4/3)	アカホヤ火山灰の造成土	5～15 cm
III 层	暗褐色土 (10YR3/3)	細小アカホヤバミス1%混じる造成土	20 cm
IV 层	褐色火山灰 (7.5YR6/6)	鬼界アカホヤ火山灰層	-cm
V 层	黒褐色土 (10YR2/2)	小バミス5%混じる (P12 又は 13 か)	35 cm
VI 层	褐色土 (10YR4/4)	サツマ大山灰の二次堆積	-cm



第 62 図 岩川官軍墓地の土層
(上：トレンチ 1 下：トレンチ 2)



第 63 図 岩川官軍基地 周辺図



第64図 蔿軍の墓 周辺図

第4節 岩川官軍墓地の調査成果

1 墓石の現況について

墓石の現状を調査したところ、79基の墓石と7基の残欠を確認した。79基のうち、8基は大きく欠損しており、石材と刻字の違いから6基は後世の造り替えと判断した（第22・23表）。

現在の配置は、大尉を筆頭に階級順となっている（第65図）。ST 1～3（士官）は、正面を西方向に向いている。それ以外の墓石は、正面を北向きに向けて配置されている。

大きさは①大尉、②少尉・少尉補、③軍曹・伍長、④兵卒・駆卒、⑤軍夫の順に小さくなっている。階級順に5つの規格となっていることを確認した。また、台石は、大尉と少尉・少尉補は2段、それ以下は1段となる。大尉と少尉・少尉補の台石の規格は、同一であるが、大尉の墓石本体の高さがわずかに高いため、大きく見える。墓石の石材は、熊本県天草市柄木町下浦の下浦石（砂岩）である。

墓石は、正面に階級・埋葬者名、右側面に死亡月日・場所、左側面に所属部隊、裏面に出身地・旧身分を刻字している。刻字は楷書体（毛筆書体）で、正面は太く、他面は細い。「崎」や「當」、「假」や「假」、「戰」「戰」の個々の刻字違いがある。階級等による違いは、字の大きさだけで、基本的な構成は同一である。

葬られている死者の数は、No. 79が軍夫9名の合葬のため、94名となる。戦死者の出身地は26県にもおよび、熊本県が15人と多く、次いで石川県が12人、和歌山県・兵庫県が6人と続く。全国の各領台から派遣されているため、全国に跨がっている（第28表）。

戦死の場所は、7月8日百引が45人・市成2人と多く、7月11日大崎村9人、7月12日大崎村假宿6名などとなっている（第25表）。

墓石は9つのブロックに区画されている（第66図）。大尉・少尉・少尉補の3基は、区画が別となっている。区画を整理する縁石は、墓石と同じ下浦石であるが、後世の造り替えでブロックや御影石になっている部分もある。熊本県では、墓石と同規格の縁石もあるが、岩川官軍墓地では、残っている縁石の規格は幅15～17cm、長さは各箇所に合わせてあり、揃っていない。

なお、墓石の配置については、昭和8（1933）年頃の岩川尋常小学校丸山義武訓導作図の略図（第67図）が残されている。これによると現在の階級順ではなく、部隊ごとに86基の墓石が配置されており、現在の配置とは大きく違う。大尉は入り口近くに配置されている。西側半分は南北方向に配置されている。また、現在擁壁部分に軍夫が配置されて、7つの区画に分かれている。官軍墓地造営当初の配置に近いのは、昭和8（1933）年と考える。

* 階級については、大尉・少尉・少尉補は士官、軍曹・伍長は下士官である。兵卒と駆卒・会計二等看病は、下士官の下に置かれる軍人である。駆卒は野砲をひく馬の駕者（馬を操る人）で、兵卒と同等である。会計二等看病卒はいわゆる衛生兵で、兵卒と同等である。軍夫は食料や弾薬を運搬をする。主に現地等で徴募され、賃金が支払われる。岩川官軍墓地に埋葬されている軍夫の多くは、熊本県出身者である。

2 各トレーナーの成果について

第69図のように3か所のトレーナーを設定して調査を行った結果、官軍墓地の造営時の造成面や、墓石・縁石の構築面を把握することができた。また、2基の遺構プランを検出することができた。

以下、各トレーナーの毎に記述をしていく。なお、各図のTrはトレーナー、STは墓石の略称である。

（1）トレーナー1（第70図）

トレーナー1は、馬場墓地管理者や『大隅町誌』から、斜面が崩れ擁壁を行ったとされたため、官軍墓地造営時の整地面の確認と後世の造成状況を調査し、不明となっている墓石等が埋没している可能性を考え設定した。

擁壁際（ブロック縫）に300×40cmのトレーナーを設定し調査を行い、さらに、ST63方向へトレーナーを拡張して、層と墓石との関係を調査した。掘削深度は、約30cmで、一部94cmまで掘削を行った。

層位はI層・II層・III層の後世の各造成土層の下層に、繩文時代早期相当と推定されるV層・VI層（サツマ火山灰層）となる。基本層位にあるIV層（アカホヤ火山灰層）は検出できなかった。IV層がないのは、崖崩れ等の削平の可能性もあるが、比較的V層上面が平坦であることや、墓地北側トレーナー2のIV層上面との標高差が15cm程度とほとんどないことから、官軍墓地造営時の造成により、削平を受けたと考えられる。

墓石や縁石と層位の関係は、ST63は、II層（造成土層）上面に建っており、ブロックの縁石はIII層（造成土層）上面に設置されている。

墓石はV層上面に建立されたが、斜面の崩壊などの後世の改修（整備）で、建て直された結果と考える。ブロックの縁石は、明らかに現代のものであり、擁壁のブロックと同一である。昭和42（1967）年の整備時に据え、造られた可能性が高い。ST63はI層（玉砂利層）の下のため、昭和42年以前の改修（整備）時の造成面に建て直されたと考える。

なお、トレーナー1の表土から、古銭（第74図30）が出土している。

(2) レンチ 2 (第 71 図)

レンチ 2 は、下層の造成面の有無や、士官（尉官）と下士官（軍曹・伍長）の立地層の調査、各墓石の墓坑の有無などの確認をする目的で、ST 3・ST 4・ST 5・ST 6 の付近に、 120×100 cm のレンチを設定した。掘削の深度は約 48 cm である。

層位は、I 層・II 層・III 層の後世の各造成土層の下層に、IV 層（アカホヤ火山灰層）が検出された。IV 層上面は、平坦面を形成しており、他のレンチの調査成果と併せて、官軍墓地造営時の造成面と考えられる。そのため、それ以上の下層掘削は行わなかった。

士官と下士官では立地層に違いが見られた。ST 3（士官）は、II 層（造成土層）の中層に立地している。ST 4・ST 5・ST 6 は、I 層（玉砂利層）に立地している。いずれも、後世の造成面に立地している。立地層の違いは、後世の改変（整備）時期の違いと考られる。

縞石は、II 層（造成土層）上面に据えられている。造営当時の下浦石で、幅 15 cm・厚み 10 cm で、長さについては、規格性はない。

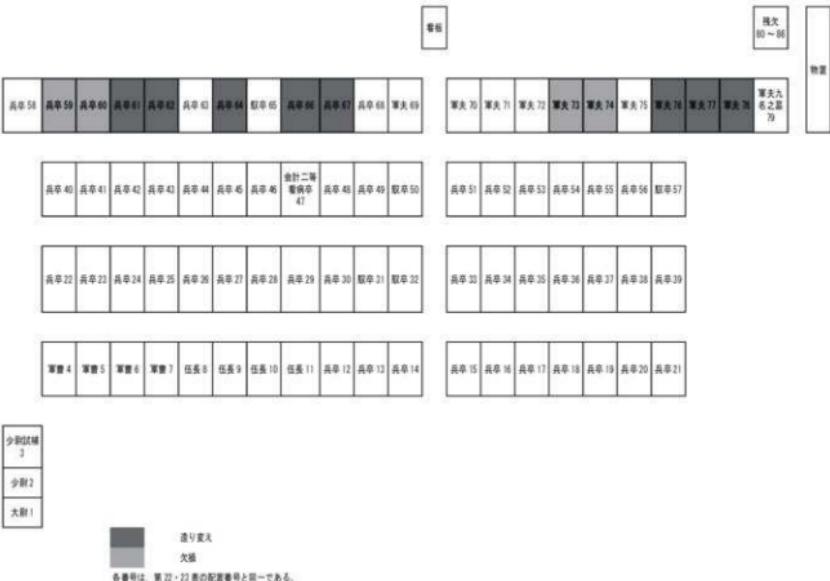
墓坑と想定できる平面プランや、落ち込みは検出できなかった。遺物も出土しなかった。

(3) レンチ 3 (第 72 図)

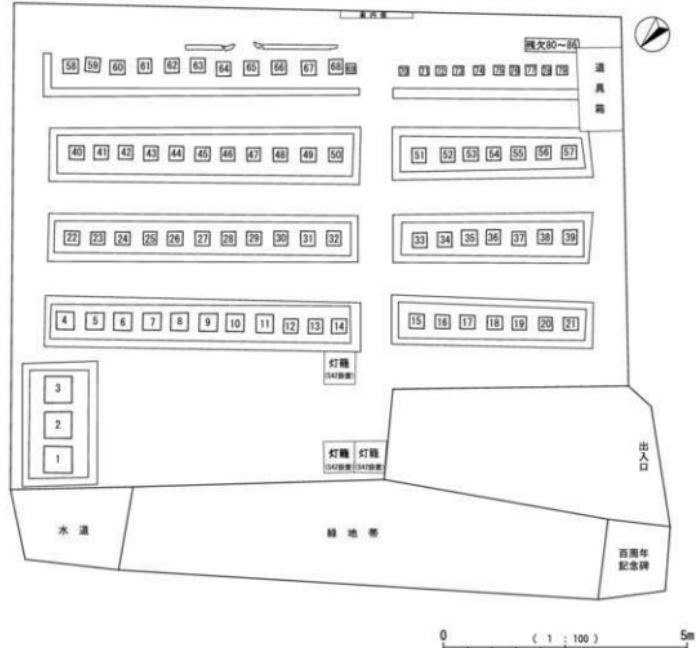
レンチ 3 は、下層の確認と官軍墓地造営時の整地面の確認、墓坑の有無の調査を目的として、官軍墓地中央部の南北に延びる通路に長さ 600 cm に渡り、交互に 7 つのレンチを設定した。

層位は、I～III 層はレンチ 1・2 と同一である。その下は各レンチで違いがある。レンチ 3-3・6 では、IV 層（アカホヤ火山灰層）を検出した。レンチ 3-1・2・7 では、IV 層が削平されており、縞文時代早期相当の V 層を検出した。

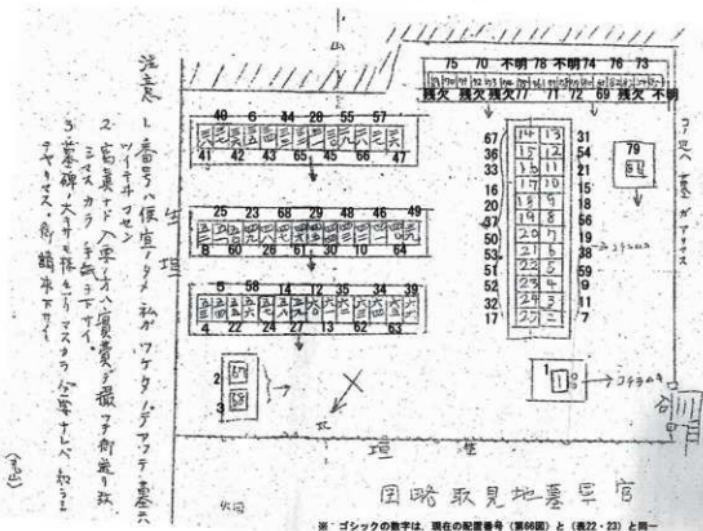
レンチ 3-3・4・5 とレンチ 3-2・6 では、III 層直下から再堆積土層を確認した。再堆積土層の一部を試掘したところ、垂直の落ち込みを確認した。その結果、遺構と想定される平面プラント及び立ち上がり（レンチ 3-2・3・6）を確認した。レンチ 3-4・5 からは、III 層直下から、レンチ 3-3 と同一の再堆積土層が検出された。このため、再堆積土層は、何らかの遺構の埋土であり、平面の検出状況や落ち込みから、2 基の遺構があると考えられる。



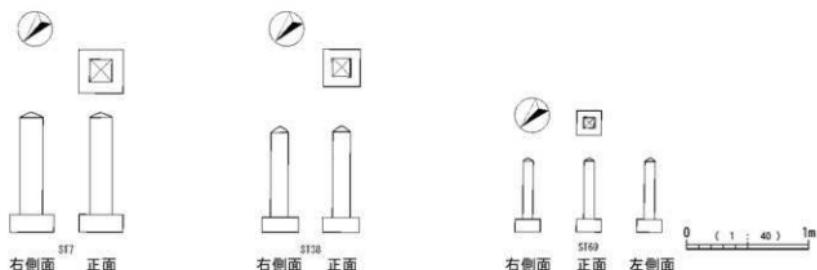
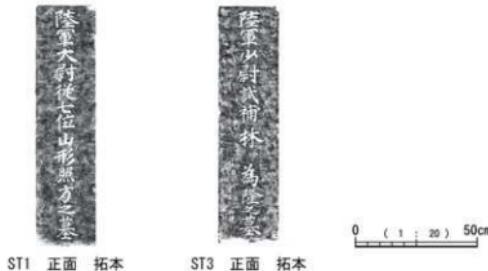
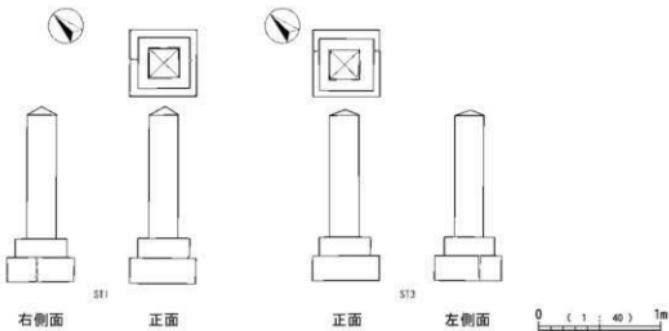
第 65 図 岩川官軍墓地 配置図（略図）



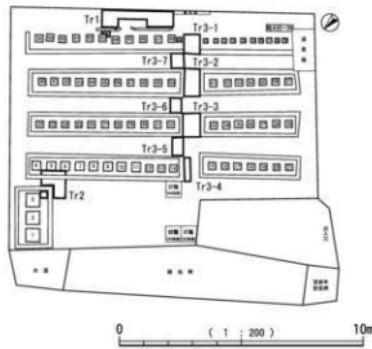
第66図 岩川官軍墓地 墓石配置図



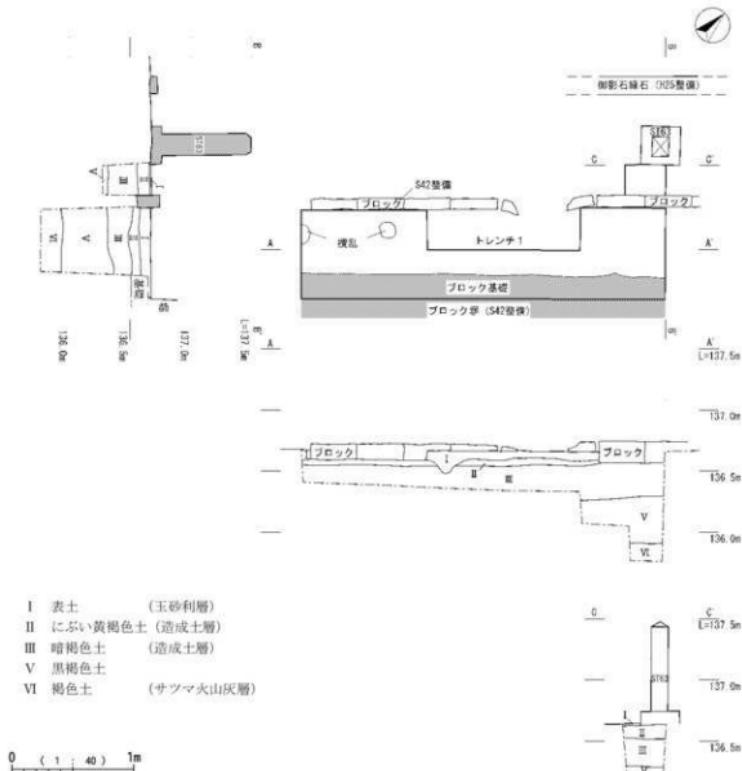
第67図 昭和8(1933)年岩川官軍墓地 墓石配置図(略図・スケール不明)
(岩川尋常小学校丸山義武訓導作図 引用・一部改変)



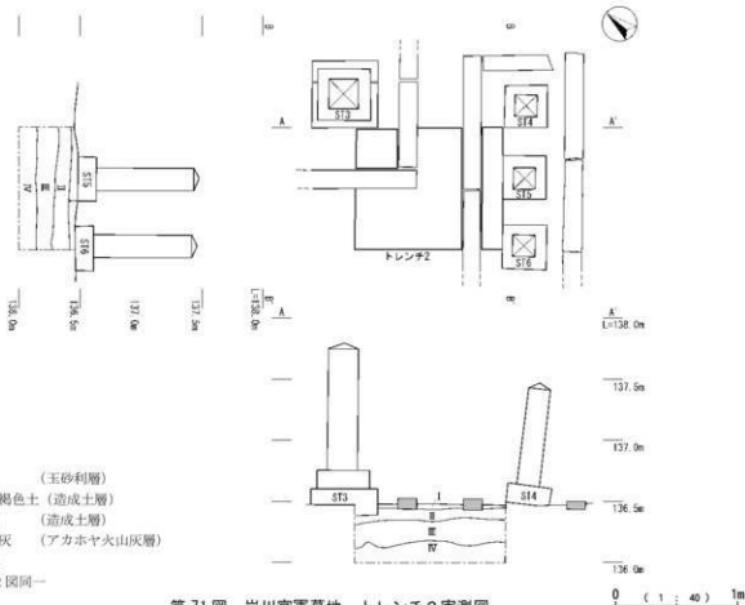
第 68 図 岩川官軍墓地 ST 1・3・7・38・69 実測図及び拓本



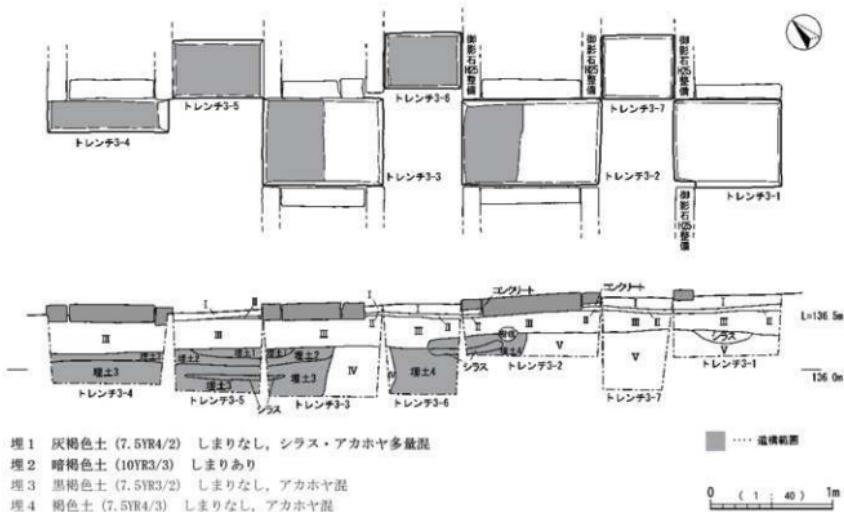
第69図 岩川官軍基地 トレンチ位置図



第70図 岩川官軍基地 トレンチ1実測図



第71図 岩川官軍基地 トレンチ2実測図



第72図 岩川官軍基地 トレンチ3実測図



第73図 岩川官軍墓地 トレンチ位置写真

再堆積土層（埋土）は、黒褐色～褐色土（埋土3・4）でアカホヤ火山灰混じりの土が主体である。全体的にしまりは弱い。各プランの埋土とⅢ層（造成土層）との間には、灰褐色土（埋土1）と、シラスの層が検出された。

2基の遺構は、官軍墓地の墓坑の可能性が高いと判断している。トレンチ3-1・3-3から古銭（第74図31・32）が出土している。

3 出土遺物について（第74図30～32）

遺物は、表土及びトレンチ3のⅢ層から、古銭が出土している。官軍墓地との関連は不明である。

熊本県八代市の若宮官軍墓地や横手官軍墓地では、墓地敷地及び墓坑からの寛永通宝の出土例がある。

30は寛永通宝である。トレンチ1のⅠ層（表土）で出土した。半分欠損している。背面は刻印はない。

31は寛永通宝である。トレンチ3-3のⅢ層（造成土）から出土した。1/4しか残存していない。「寛」の刻印のみで、背面は刻印はない。

32は寛永通宝である。トレンチ3-1のⅢ層（造成土）から出土した。半分欠損しており、腐食が激しい。表面の刻印ははつきりしないが、「寛」と「通」の刻印が残る。背面には刻印はない。

4 薩軍の墓（第75・76図）

薩軍の墓については、墓石の配置図作成と墓石の実測、写真撮影を行った。

薩軍の墓は、周辺に茶畑が広がる台地の先端の杉林の中に存在している。ほぼ平坦の地形に、マウンド状の塚に立石が建立されている。

墓石は、細長い台形状で、高さ70cm、上部幅25cmで下部にかけて徐々に広がり、下部幅60cmである。石の厚みは10～15cmである。石材は凝灰岩で、刻字はない。塚の頂部に埋設されているので、全体の大きさは不明である。

表面・側面に荒い加工痕が残り、おおよその形を意識して加工されている。

塚は、土で整形されている。300×260cmの楕円形を呈しており、高さが約70cmである。現在は、表面には苔が生え、周辺環境と調和がとれている。

明治10（1877）年7月に、この周辺（岩崎）の戦闘で亡くなった西郷軍兵士を葬ったと伝承されている（大隅町誌編纂委員会1990）。しかし、史料もなく、地元にもあまり知られていない。ここに建立された経緯や、埋葬された人数や埋葬されている人物は不明である。

なお、同じ台地の周辺の林を踏査したが、同様の構造物等の施設は発見できなかった。

【引用・参考文献】

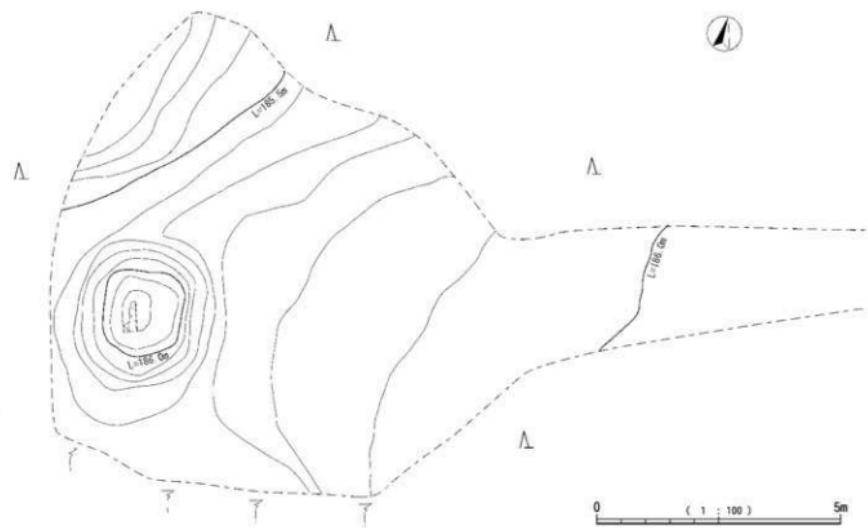
大隅町誌編纂委員会（編） 1990『大隅町誌』（改訂版）



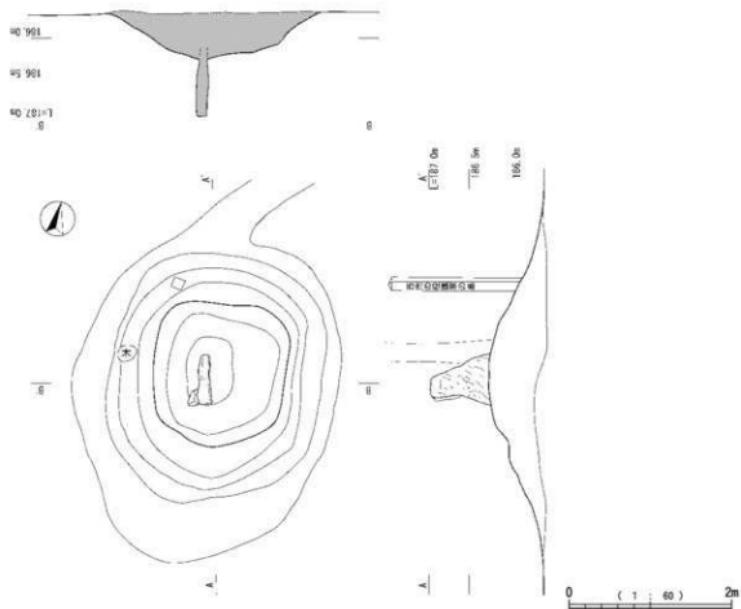
第74図 岩川官軍墓地 出土遺物

第21表 岩川官軍墓地 古銭 観察表

挿図番号	掲載番号	実測番号	取上番号	トレンチ	層位	種類	法量(cm)			色調	備考
							全長	厚さ	孔		
74	30	P003	一括	トレンチ1	表土	寛永通宝	(2.5)	0.1	—	1.30	オリーブ褐色 (2.5YR4/4)
74	31	P002	一括	トレンチ3-3	Ⅲ層	寛永通宝	(1.0)	0.1	—	0.89	オリーブ褐色 (2.5YR4/5)
74	32	P001	一括	トレンチ3-1	Ⅲ層	寛永通宝	(2.5)	0.1	—	1.26	オリーブ褐色 (2.5YR4/6)



第75図 薩軍の墓 遺構配置図



第76図 薩軍の墓 基石実測図

第22表 岩川官軍墓地 石碑刻字一覧（1）

記載	表面	右側面		左側面		裏面	出身地	旧身分	就損状況	備考
		所属部隊	死亡年月日・死傷歴	所属部隊	死亡年月日・死傷歴					
1 陸軍大尉 從七位	山形 重九郎 之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因肝風熱死引戰死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因肝風熱死引戰死	黑本郡 肥後國鹿田郡京町	土族	卒み	『埋』は山縣と記す	
2 陸軍少尉 萬田 政實	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下日 向國諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下日 向國諸縣大鍋死	高知郡 土佐國土佐郡東原村	土族	卒み・ヒビ		
3 陸軍少尉 林 為隆	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下日 向國諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下日 向國諸縣大鍋死	高知郡 尾瀬郡春日井村・南丸町	土族	卒み		
4 陸軍軍曹 山川 正盛	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下日 向國諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下日 向國諸縣大鍋死	東京義理軍第一團二連隊 第一大隊第一・中隊	常陸國茨城郡常磐村	土族	卒み・ヒビ大	
5 陸軍軍曹 食 治治	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因肝風熱死引戰死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因肝風熱死引戰死	近衛工兵第一小隊	石川郡 加賀國石川郡材木町二丁目	平民	卒み	
6 陸軍軍曹 村川 道義	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	石川郡 加賀國石川郡長生郡・盛町	土族	卒み		
7 陸軍軍曹 松本 実五郎	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	人吉郡 人吉郡多良木村	静岡郡 駿河國志太郡人吉村	土族	卒み	
8 陸軍軍長 長田 衛三郎	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	名古屋義理軍第一團七連隊 第一大隊第一・中隊	石川郡 加賀國河北郡大堺池田	平民	卒み・ヒビ大・ 剥落	
9 陸軍伍長 脇井 一之助	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	吉野義理軍第一團二連隊 第一大隊第一・小隊	石川郡 加賀國石川郡枚岡町	土族	卒み	
10 陸軍伍長 相原 乾次郎	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	名古屋義理軍第一團七連隊 第一大隊第一・中隊	石川郡 趙中國新川郡富山身上立町	平民	卒み	
11 陸軍伍長 野尻 槍次	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因肝風熱死引戰死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因肝風熱死引戰死	近衛兵 第一大隊第一・小隊	石川郡 加賀國石川郡金澤村	土族	卒み	
12 陸軍兵卒 阿彌 三郎	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	近衛兵 第一大隊第一・小隊	石川郡 近衛兵第一團六小隊	平民	卒み	
13 陸軍兵卒 折木 己之助	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	福島義理軍第一團八連隊 第一大隊第四・五隊	福島郡 磐城國久慈郡下川村	平民	卒み・ 剥落	『埋』は三之助と記す
14 陸軍兵卒 後藤 康吉	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	名古屋義理軍第一團七連隊 第一大隊第一・中隊	石川郡 爱知國名島郡中島村	平民	卒み・ヒビ大・ 剥落	
15 陸軍兵卒 鶴見 光之助	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	吉野義理軍 第一大隊第一・小隊	和歌山郡 和伊國海南郡都留村	平民	卒み・ヒビ 矢に一部欠けあり。	
16 陸軍兵卒 堤原 右吉	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因肝風熱死引戰死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因肝風熱死引戰死	大坂義理軍第一團十連隊 第一大隊第一・中隊	福島郡 福島國周氏二區化野村	平民	卒み	『埋』は坂岩、『忘』は 堤原と記す
17 陸軍兵卒 内製 幸平	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	近衛兵 第一大隊第一・小隊	滋贺郡 河内國立石郡上ヶ原村	平民	卒み	
18 陸軍兵卒 津井 喜市	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	吉野義理軍 第一大隊第一・小隊	兵庫郡 兵庫國二座郡淡井村	平民	卒み	
19 陸軍兵卒 諸方 契市	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因肝風熱死引戰死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因肝風熱死引戰死	吉野義理軍 第一大隊第一・小隊	石川郡 加賀國石川郡金澤町	土族	卒み・剥落	『埋』は諸方、『忘』は 契市と記す
20 陸軍兵卒 保木 幸平	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	大坂義理軍第一團十連隊 第一大隊第一・中隊	和歌山郡 紀伊國伊都郡丁ノ町村	平民	卒み	
21 陸軍兵卒 上田 定之助	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	近衛兵 第一大隊第一・小隊	兵庫郡 丹波國土居郡都忙村	平民	卒み	
22 陸軍兵卒 村田 順五郎	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	近衛兵 第一大隊第一・小隊	滋贺郡 越前國御復郡都忙村	平民	卒み	『埋』は順五郎と記す
23 陸軍兵卒 折木 桂次郎	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	吉野義理軍 第一大隊第一・小隊	兵庫郡 兵庫國二座郡淡井村	平民	卒み	
24 陸軍兵卒 大橋 久助	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	吉野義理軍 第一大隊第一・小隊	石川郡 加賀國石川郡金澤町	土族	卒み・剥落	
25 陸軍兵卒 柴原 忠	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	名古屋義理軍第一團七連隊 第一大隊第一・中隊	和歌山郡 和伊國伊都郡丁ノ町村	平民	卒み	
26 陸軍兵卒 野川 幸代吉	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	近衛兵 第一大隊第一・小隊	山口郡 周防國佐喜郡大瀬浦村	平民	卒み	『埋』は幸代吉と記す
27 陸軍兵卒 小野木 忠作	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	名古屋義理軍第一團八連隊 第一大隊第一・中隊	兵庫郡 丹波國土居郡都忙村	平民	卒み	
28 陸軍兵卒 宮田 瞬無	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	名古屋義理軍第一團七連隊 第一大隊第一・中隊	安曇義理郡北山郡那井村	平民	卒み	
29 陸軍兵卒 牧野 庄吉	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	名古屋義理軍第一團八連隊 第一大隊第一・中隊	福岡郡 筑前國東大村石村	平民	卒み	
30 陸軍兵卒 藤原 敏政	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	近衛兵 第一大隊第一・中隊	出雲義理郡石船子村	平民	卒み・ヒビ大・ 剥落	
31 陸軍兵卒 島田 正知	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	近衛兵 第一大隊第一・小隊	福岡郡 筑前國御野郡岡山郡忍辱村	土族	卒み	
32 陸軍兵卒 梅田 哲造	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	大坂義理軍第一團十連隊 第一大隊第一・中隊	兵庫郡 但馬國若野郡野野村	平民	卒み	
33 陸軍兵卒 飯田 栄吉	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	大坂義理軍第一團十連隊 第一大隊第一・中隊	三重郡 伊勢國三重郡麻績村	平民	卒み	
34 陸軍兵卒 渡邉 豊吉	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	仙台義理軍第一團八連隊 第一大隊第一・中隊	福岡郡 代國川田郡堀澤村	平民	卒み	
35 陸軍兵卒 大橋 出	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	仙台義理軍第一團八連隊 第一大隊第一・中隊	福岡郡 相模國足那郡出田村	平民	卒み	
36 陸軍兵卒 加賀 長蔵	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	南山郡 周防國阿久根郡大津洋村	平民	卒み・剥落		
37 陸軍兵卒 音倉 信次	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	名古屋義理軍第一團七連隊 第一大隊第一・中隊	岐阜郡 岐阜國安濃郡大野村	平民	卒み	
38 陸軍兵卒 曾田 信重	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	名古屋義理軍第一團八連隊 第一大隊第一・中隊	岐阜郡 岐阜國安濃郡大野村	平民	卒み	
39 陸軍兵卒 五十嵐 廉作	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	愛媛郡 伊予國西予郡大河内村	大河内郡 大河内郡大河内村	土族	卒み・ヒビ大・ 剥落	
40 陸軍兵卒 野村 航吉	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	愛媛郡 伊予國西予郡大河内村	大河内郡 大河内郡大河内村	土族	卒み・剥落	
41 陸軍兵卒 高山 嘉奈次	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	愛媛郡 伊予國西予郡大河内村	大河内郡 大河内郡大河内村	土族	卒み	
42 陸軍兵卒 砂谷 駿助	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	愛媛郡 伊予國西予郡大河内村	大河内郡 大河内郡大河内村	土族	卒み	
43 陸軍兵卒 鰐谷 常吉	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	山形郡 羽后國川辺郡西谷村	大河内郡 大河内郡西谷村	平民	卒み	
44 陸軍兵卒 田村 正則	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	山形郡 羽后國川辺郡和歌山	大河内郡 大河内郡和歌山	平民	卒み・剥落	
45 陸軍兵卒 中野 清四郎	之助	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	義理	明治十年七月五日於鹿児島縣下大鍋 因諸縣大鍋死	山形郡 羽后國阿武隈郡郷内村	大河内郡 大河内郡郷内村	平民	卒み	

第23表 岩川官軍墓地 石碑刻字一覧（2）

配賦 編成	表面 姓名	右側面 死亡月日・死傷場所	左側面 所属部隊	裏面 出身地		既損状況	備考
				出身地	旧身分		
16 謙軍兵卒 多精 仁三郎 之輔		明治十年七月一日於鹿児島縣下目 后國諸縣人皆假報之戰死	名古屋鎮臺軍第7聯隊 第一大隊第二中隊	石川郡 加賀國石川郡金澤町田	平民	幸み	
17 佐野一等 看守平	石橋 之萬 之輔	明治十年七月八日於鹿兒島縣下大鍋 原野村戰死	名古屋鎮臺軍第7聯隊	石川郡 加賀國石川郡金沢町長	土族	幸み	
18 謙軍兵卒 河野 庄吉		明治十年七月二十一日於鹿兒島縣下日 高鍋原野村戰死	鹿児島步兵第十二聯隊 第一大隊第十一中隊	高知郡 高知阿波國伊東郡助任町	平民	幸み	
19 謙軍兵卒 今野 酒八		明治十年一月廿一日於鹿兒島縣下 仙霞臺原野村第四聯隊 第一大隊第四中隊	宮城縣 中国宮城郡仙台八番町	土族	幸み		
20 謙軍兵卒 南保 安三郎 之輔		明治十年七月九日在鹿兒島縣下大鍋 原野村戰死	古義兵第 第一大隊第一小隊	石川郡 加賀國石川郡金澤	土族	幸み・倒壊	
21 謙軍兵卒 岡口 一松 之輔		明治十年七月五日至於鹿兒島縣下大鍋 原野村戰死	近衛兵 第一大隊第一小隊	山鹿郡 信濃國北条今北村	平民	幸み・倒壊	『理』は坂口と記す
22 謙軍兵卒 千品 道次郎 之輔		明治十年七月二十一日於鹿兒島縣下大鍋 原野村戰死	近衛兵 第一大隊第一小隊	和歌山 紀伊國名草郡鳥羽町	平民	幸み	
23 謙軍兵卒 化作藤 善太郎 之輔		明治十年七月二十一日於鹿兒島縣下大鍋 原野村戰死	近衛兵 第一大隊第一小隊	山鹿郡 播磨國加西郡西脇村	平民	幸み	
24 謙軍兵卒 伊藤 長之助 之輔		明治十年七月五日至於鹿兒島縣下大鍋 原野村戰死	近衛兵 第一大隊第一小隊	伊勢國三重郡西日野村	平民	幸み	
25 謙軍兵卒 曾田 信次郎 之輔		明治十年七月二十一日於鹿兒島縣下日高 原野村都龜井村戰死	鹿児島步兵第一聯隊 第一大隊第一中隊	上陸上 古國國地上郡萩村	平民	幸み・ヒビ・ 剥落	
26 謙軍兵卒 朝倉 鹰麿 之輔		明治十年七月二十日於鹿兒島縣下大鍋 原野村都龜井村戰死	近衛兵 第一大隊第一小隊	吉野郡 信濃國日野郡都久村	平民	幸み	
27 謙軍兵卒 王慶 立成 之輔		明治十年七月二十一日於鹿兒島縣下日高 原野村都龜井村戰死	近衛兵 第一大隊第一小隊	和歌山 紀伊國日高郡熊野村	平民	幸み	
28 謙軍兵卒 吉永 長藏 之輔		明治十年七月廿一日於鹿兒島縣下大鍋 原野村都龜井村戰死	東京鎮臺步兵第二聯隊 第一大隊第一中隊	茨城縣 第八人選小山村	平民	修復・幸み・ ヒビ・倒壊	
29 謙軍兵卒 田村 良典 之輔		明治十年七月四日在日高郡伊豆人領國 原野村戰死	近衛兵 第一大隊第一小隊	和歌山 紀伊海土郡和歌新通	土族	通り替え・ ヒビ	
30 謙軍兵卒 石井 兼八 之輔		明治十年七月廿一日於鹿兒島縣下日高 原野村都龜井村戰死	鹿児島步兵第一聯隊 第一大隊第一中隊	山鹿郡 中国鹿児島郡子位庄村	平民	通り替え・ ヒビ	
31 謙軍兵卒 花田 仁助 之輔		明治十年七月廿一日於鹿兒島縣下日高 原野村都龜井村戰死	鹿児島步兵第一聯隊 第一大隊第一中隊	鹿児島 第一大隊第一小隊	平野	上/1欠損	
32 謙軍兵卒 太友 喬次郎 之輔		明治十年七月十八日於鹿兒島縣下日高 原野村都龜井村戰死	鹿児島步兵第四聯隊 第一大隊	牧田郡 第一大隊九小隊茂庄村	平野	上/1欠損	下部のみ、しかし、こ れも、正しいかは不明。
33 謙軍兵卒 伊藤 宗五郎 之輔		明治十年一月〇〇日於鹿兒島縣下仙台 原野村都龜井村戰死	吉浦郡 第五人選口敷日村	平野	接合で複元・ 剥落	M10. 10. 21 都城病院にて病死	
34 謙軍兵卒 山市 大里 之輔		明治十年一月〇〇日於鹿兒島縣下仙台 原野村都龜井村戰死	仙台第一一〇一 第一大隊	森原郡 仙台三戸郡子村	平野	台石に接合	M10. 10. 16 都城病院にて病死
35 謙軍兵卒 木村 芳哉 之輔		明治十年七月五日至於鹿兒島縣下大鍋 原野村都龜井村戰死	近衛兵第 第一大隊第一小隊	高知郡 阿波國名東郡化占橋小路	土族	接合で復元・ 剥落	
36 謙軍兵卒 實賀 幸吉 之輔		明治十年七月廿一日於鹿兒島縣下日高 原野村都龜井村戰死	木戸郡 上野園町岩見沢川村	平野	上/1欠損	M10. 7. 8 白引にて死亡	
37 謙軍兵卒 伊藤 伊郎 之輔		明治十年七月八日於鹿兒島縣下日高 原野村都龜井村戰死	(未だ) 鹿児島陸兵兵 種第下大鍋原野村都龜井村	山口郡 長門國御津郡山川村	平野	真ん中部分の み	
38 謙軍兵卒 西村 雪吉 之輔		明治十年七月廿一日於鹿兒島縣下日高 原野村都龜井村戰死	鹿児島陸兵兵 種第下大鍋原野村都龜井村	山口郡 長門國御津郡山川村	平野	剥離・新しい	
39 軍夫 宮室 門 之輔		明治十年七月廿八日於鹿兒島縣下大鍋 原野村都龜井村戰死	別銘第一 旗團輕車部	鹿児島 肥後國第五大區嘉麻村	土族	後援国第五大區嘉麻村	
40 軍夫 山本 文次郎 之輔		明治十年七月廿八日於鹿兒島縣下大鍋 原野村都龜井村戰死	別銘第二 旗團輕車部	鹿児島 肥後國第五大區宇土平野町	土族	接合で復元・ 剥落	M10. 10. 21 都城病院にて病死
41 軍夫 木田 佐七 之輔		明治十一年七月八日於鹿兒島縣下大鍋 原野村都龜井村戰死	別銘第一 旗團輕車部	鹿児島 肥後國第六大區原村	ヒビ	後援国第六大區原村	
42 軍夫 杏村 春七 之輔		明治十一年七月廿三日於鹿兒島縣下大鍋 原野村都龜井村戰死	別銘第一 旗團輕車部	鹿児島 肥後國第五大區立田村	剥離		
43 軍夫 火神 喜平 之輔		明治十一年七月八日於鹿兒島縣下大鍋 原野村都龜井村戰死	別銘第二 旗團輕車部	(無)	通り替え		
44 軍夫 内田 金次 之輔		明治十一年七月八日於鹿兒島陸兵大鍋原 野村都龜井村戰死	別銘第二 旗團輕車部	鹿児島 肥後國第五大區竹道村	通り替え		
45 軍夫 宮本 新平 之輔		明治十一年七月八日於鹿兒島陸兵大鍋原 野村都龜井村戰死	別銘第二 旗團輕車部	鹿児島 肥後國第五大區水村	接合で復元・ ヒビ		
46 軍夫 古谷 達七 之輔		明治十一年七月八日於鹿兒島陸兵大鍋原 野村都龜井村戰死	別銘第二 旗團輕車部	鹿児島 肥後國第五大區川村	上/1欠損	『理』には富留村付とあり	
47 軍夫 工原 五平 之輔		明治十一年七月八日於鹿兒島陸兵大鍋原 野村都龜井村戰死	別銘第一 旗團輕車部	鹿児島 第六大區御津村	剥離・ 上/2欠損		
48 軍夫 尾瀬 茂吉 之輔		明治十一年七月八日於鹿兒島陸兵大鍋原 野村都龜井村戰死	別銘第一 旗團輕車部	鹿児島 第六大區御津村	通り替え・ 上/2欠損		
49 軍夫 久名 之輔		明治十一年七月八日於鹿兒島陸兵大鍋原 野村都龜井村戰死	(無)				
50 軍夫 水上 大士 之輔		明治十一年七月八日於鹿兒島陸兵大鍋原 野村都龜井村戰死	別銘第一 旗團輕車部	鹿児島 肥後國第五大區水村	下/1欠損	『理』は大平、『理』は 文字と記す	
51 軍夫 佐々木 初太 之輔		明治十一年七月八日於鹿兒島陸兵大鍋原 野村都龜井村戰死	別銘第一 旗團輕車部	鹿児島 肥後國第五大區高志村	下/1欠損		
52 軍夫 山形 能龍 之輔		明治十一年七月八日於鹿兒島陸兵大鍋原 野村都龜井村戰死	別銘第一 旗團輕車部	(無)	上/1/2欠損 被削・ 2つに割れ。	後世、取り替えたよう で、2つ現存する。	
53 軍夫 坂本 壽七 之輔		明治十一年七月八日於鹿兒島陸兵大鍋原 野村都龜井村戰死	別銘第一 旗團輕車部	鹿児島 肥後國第六大區高志村	欠損	2つに割れ。	
54 軍夫 月見 駿治 之輔		明治十一年七月八日於鹿兒島陸兵大鍋原 野村都龜井村戰死	別銘第一 旗團輕車部	鹿児島 肥後國第六大區高志村?	欠損	残次〔軍夫〕が基石か?	
55 軍夫 吉岡 美義 之輔		明治十一年七月八日於鹿兒島陸兵大鍋原 野村都龜井村戰死	別銘第一 旗團輕車部	鹿児島 肥後國第六大區七高志村	欠損	残次〔長兵〕が基石か?	
56 軍夫 下田 平次 之輔		明治十一年七月八日於鹿兒島陸兵大鍋原 野村都龜井村戰死	別銘第一 旗團輕車部	鹿児島 肥後國第六大區高志村	欠損		
57 軍夫大?	犬 之基					間違いない大の基石有 り。5名あったとのこと。 野口久美氏や川原 田代記載。	

第22・23表は、加塙秀樹氏（曾於市教育委員会）の調査結果を一部改変し、さららに現存している墓石にある刻字を確認して作成した。太文字は、剥離又は破損している部分を示す。文字は墓石を判読し、別資料から推定した箇所もある。

太文字で下線は、破損したため判読不能のため、文字は別資料から記載したもので推定である。

後世に造り直した墓石も確認された。その墓石は、59 田村良直・60 石井友八・73 大神喜平・74 内田 村次・77 工藤 古平・78 須 茂吉・82 山際健藏・83 坂本彦彦である。

墓石を確認できなかった埋葬者は、大友治郎（No62の可能性あり）・月足新治・古閑菊壽・下岡平次である。

参考考収の『理』は、昭和8年丸山義武作の『岩川町馬場西南役官墓地埋葬者名録』を指す。

参考考収の『忠』は、平成2年青潮社刊行の『西南の役宿園社忠魂史』を指す。

第24表 岩川官軍墓地 階級別墓石計測値

階級/墓石部位 単位(cm)	墓石+台石		墓石		台石		下台石	
	高さ	高さ	幅	高さ	幅	高さ	幅	
大尉	143.5	107.5	24	15	42.5	21	55	
少尉・少尉補	139.5	103.5	24	15	42.5	21	55	
下士官(軍曹・伍長)	98.5	83.5	18.5	15	36.5			
兵卒・馴卒	86.5	74	15	12.5	30.5			
軍夫	60	49	9	11	21			

第25表 岩川官軍墓地 戦死場所・戦死日一覧

死亡日/戦死場所	鹿屋病院	洪坂	百引	市成	大崎村	大崎村假宿	荒佐野	永吉村	鍋村	岩川村	都城	都城病院	不明	合計	
7月1日	1				1									2	
7月6日		1												1	
7月8日		45	2										1	48	
7月11日					9		1							10	
7月12日						6		1						7	
7月23日									2	3				5	
7月24日											1			1	
9月17日												1		1	
10月8日												1		1	
10月12日												1		1	
10月29日											1			1	
10月不明												1		1	
11月3日												1		1	
11月21日												1		1	
11月22日												1		1	
不明			2										2	4	
合計		1	1	47	2	10	6	1	1	2	3	2	7	3	86

第26表 岩川官軍墓地 埋葬者階級別数

大尉	少尉	少尉補	軍曹	伍長	兵卒	会計二等看病卒	馴卒	軍夫
1	1	1	4	4	48	1	8	26

第27表 岩川官軍墓地 埋葬者所属別数

廣島鎮臺	名古屋鎮臺	東京鎮臺	近衛工兵	大坂鎮臺	近衛砲兵	仙臺鎮臺	別働第一旅團	不明
15	12	4	1	4	23	9	15	11

第28表 岩川官軍墓地 埋葬者出身県別数

熊本県	石川県	兵庫県	和歌山県	山口県	福島県・愛媛県・岡山県・高知県・壱岐
15	12	各6		5	各3
					愛知県・茨城県・岐阜県・宮城県・三重県・秋田県・静岡県・島根県
					各2
					福岡県・広島県・埼玉県・山形県・滋賀県・青森県・千葉県・栃木県
					各1
					不明
					11

※壱岐県はあるが、現在の大坂府東南部と奈良県の付近で、壱岐市が県庁所在地として、慶應4（1868）年に誕生し、明治14（1881）年に大阪府に編入されている。

總括

第7章 総括

第1節 滝ノ上火薬製造所跡

1 施設の役割の検討

安政3(1857)年に、調合指揮方の竹下伊右衛門が『銃薬製式録』を記し、銃薬局の詳細について記載している。これを判読する形で各建物の検討を行いたい。以下の詳述する『』内の施設は『銃薬製式録』に、「」は第77図「銃薬方」に記載されている名称である。両史料にある名称が違うため、想定できる範囲で並列する。「銃薬方」(第77図)に記載があり、今回推定できなかつた施設については、その用途は不明である。

水車は、全部で6基記してあり、1日で精製する銃薬は199斤6号1勾8撮070016(約120kg)、年間6万8148斤4合9勾8撮332(約41,000kg)の製造能力を有するとあり、日本でも他にないと記されている。

『第1 銃薬水車』「銃薬水車」

周囲4丈4尺1寸(13.23m)・幅1尺3寸5分(40.5cm)・8個の臼を設け、調練用に備えている。

『第2 銃薬水車』「右同と記載の銃薬水車」

周囲4丈1尺2寸5分(14.4m)・幅1尺3寸(39cm)・6個の臼を設け、軍役用に備えている。

『第3 銃薬水車』「右同と記載の銃薬水車」

規模は第一水車と同じで、臼を8個設け、官給用に備えている。

『第4 銃薬水車』「右同と記載の銃薬水車」

周囲4丈4尺7寸(13.41m)・幅1尺3寸(33cm)で、10個の臼を設け、軍役用に備えている。

『第5 銃薬水車』「右同と記載の銃薬水車」

規模は第一水車と同じで、臼を8個設け、軍役用・調練用・官給用に備えている。

『第6 硝石硫黄簡車』「硫黄車・硝石水車」

周囲4丈1尺2寸5分(12.3m)・幅1尺3寸(39cm)・左に3個の臼を設け、硫黄を粉碎し、右に3個の臼を設け、硝石を粉碎している水車である。

『第7 軍役用並訓練銃薬策実小屋』「不明」

3敷3間の建物で、植や杵を用いて、軍役用の砲弾に火薬をつめる作業場と推定される。

『第8 官給銃薬策実小屋』「不明」

4敷3間の建物で、植や杵を用いて、官給用の砲弾に火薬をつめる作業場と推定される。

『第9 軍役用ならびに訓練銃薬策実小屋』「不明」

4敷4間の建物で、籠にかけて火薬を大きさ別に分けている施設と推定される。火花が散らないように道具には、竹を用いている。

『第10 官給銃薬策小屋』「不明」

4敷3間の建物で、第9と同じ施設である。

『第11 軍役方訓練方銃薬乾棚』「銃薬乾所」

軍役用3敷10間・官給用6敷6間の大きさで、柿漆紙で屋根をつくり、銃薬を乾燥する施設と推定される。

『第12・13 防鼠庫』「銃薬庫」

1軒は5敷3間で2階建て、軍役用の銃薬を収納し、1軒は、3敷1間3尺で、官給用の銃薬を収納する施設と推定される。

『第14・15 軍役訓練用官給用銃薬調合所』「不明」

硝石・硫黄・木炭を調合する施設と推定される。4敷2軒と3敷2軒の建物があり、調練及び官給用の銃薬調合小屋と記されている。

『第16 木炭搗き小屋』「木炭細末所」

4敷4間の建物で、木炭を粉末にした施設と推定される。

『第17 麻桿板庫』「麻木蔵」

4敷6間の建物で、麻桿(忤)とあるが、麻桿のことではないか。麻桿は、いちばんからと呼ばれ、植物のイチビの茎を剥いで、焼き炭にして、火口に用いる。その倉庫と推定される。

『第18 官給銃薬小出庫』「銃薬小出し蔵」

2敷1間3尺の建物で、銃薬を供給する場所と推定される。1斤(約600g)を264文49と記されている。

『第19 大砲煉弾並びに木管導薬製作所』「不明」

木管導薬とあることから、白砲信管である木管を製造した建物と推定される。台場用に備えると記載があるので、祇園に洲砲台や天保山砲台等へ供給していたのかもしれない。

『第20 雜物板庫』「役局」

5敷3間で底1つある建物である。銃薬並びに硝石・硫黄等の出納場所である。

『第21 硝石硫黃板庫』「不明」

硝石や硫黄を貯蔵した倉庫と推定される。

『第22 大砲小銃薬包製作所』「バトロン製作所」

大砲・小銃の実包を製作した場所を推定される。1日2,000発・年間72万発製造したとされ、軍用方と調練方では、製作方法が違うことが記されている。

『第23 百五十銭戦砲薬包型』

砲弾の型の法量を記した箇所で、建物ではない。

『第24 急火管製作所』「ボイセン詰所」

4敷1間の建物である。大砲用の火管(かん)、いわゆる雷管を製作した場所と推定される。

『第25 書籍勝写所』「書写方」

4敷1間の建物である。勝写人3人で、砲術に関する重要な書籍を勝写すると記されている。午前9時頃から午後4時頃まで勤務し、年俸が4石となっている。

『第26 日記所』「役局」

役人の詰所と推定される。上の間8帖敷・見闇役8帖敷・取扱役3帖敷・附役手伝小使4帖半と記される。その他、多くの雑物収蔵所(役局)があったようである。

『第27 桶詰所』「銃薬桶製作所又は銃薬桶団場」

4敷4間の建物である。銃薬を入れる桶の製作及び充填する場所と推定される。椎材で製作し、1つの桶に50斤(約30kg)を入れ、犬追村や郡元村などの銃薬庫

に運送していたようである。

『第 28 硝石煎法小屋』「精製硝石煮所」

4 敷 2 間 3 尺の建物で、煉瓦の家である。硝石を煮詰め、煎じるような場所と推定される。

『第 29 麻稈焼所』「木灰焼場」

4 敷 3 間の建物で、煉瓦の家である。麻稈を焼く施設と推定される。銅製釜 10 個（釜の径 42.6 cm・深さ 42.6 cm）があり、麻稈を釜で焼き、1 釜分 2 斤半（約 1.5 kg）になると記されている。

『第 30 麻稈倉庫所』「キザミ場」

4 敷 2 間の建物である。麻稈を裁断する施設である。

『第 31 黒墨青製法小屋』「不明」

4 敷 3 間の建物である。松ヤニを製造していたと推定される。

『第 32 大工桶給並役丁休息小屋』「不明」

2 軒あり、4 敷 5 間と 5 敷 4 間の建物がある。昼食時の休息場と推定される。1 筋薬水車に 9 人ずつ配置されていることが記されている。

『記載なし』「大幅機織場」

洋式船の帆の布を作成していたと推定される。

その他

銅薬の売上として、7,590 貨以上となっている。茶そとのほかに諸果実の売上が 8 貨ぐらいになったようである。第 77 図の「此辺茶園」で生産されたものと考えられる。

「水神山神十一回觀世音菩薩を崇めて、毎月 16 日・18 日には、大興寺持院の僧が来て祭祀を行い、境内の安寧を祈り、16 日には、すべての職人が申の刻より休むことが定例になっている」と記されている。觀世音菩薩

が置かれていた場所は、第 77 図の「滝の上くわんおん堂」であろう。

※ 「軍役用」は藩用、「調練用」は訓練用、「官給用」は個々の武士用と考えられる。

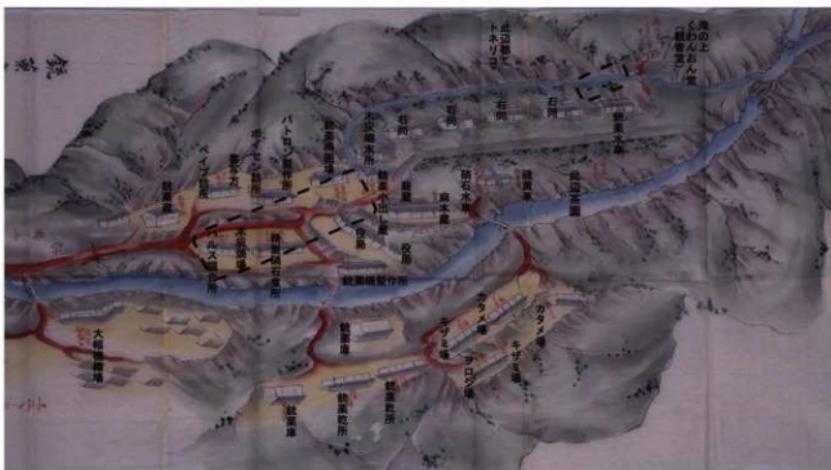
※ 建物の大きさを表すのに「敷」と記されているが、単位が不明のため原文とおり記載した。

2 現在も残る遺構

現在残る導水路や石垣は絵図（第 77 図）にも、描かれており、滝ノ上火薬製造所操業時に構築されたものと考えられる。石垣は、急崖に面しているため、擁壁や土留めの役割を担ったものと推定される。導水路は、水車への引き込みや下流域へ水流を流すための施設と考えられる。滝ノ上火薬製造所が稼働した時期は、設立期の第 1 期、集成館事業に組み入れた時の第 2 期、明治になり陸軍の管轄となった時の第 3 期となるが、今回調査した各遺構の細かい時期を明確にする調査成果は得られなかつた。

また、絵図（第 77 図）の精製硝石煮所や木灰焼場に煉瓦が使用されているため、博（第 26 図 3）は、その建物の煉瓦とも考えられ、トレーナー付近は絵図（第 77 図）の該当建物の位置の可能性がある。そのため、調査区 1～2 に残る石垣は絵図の点線付近と推定され、山側のバトロン製作所やボイセン詰所などの建物の痕跡が残っている可能性がある。また、調査区 3 の導水路は、銅薬水車の点線部分付近と推定される。

明治 10 (1877) 年に火薬製造所としての役割は終えるが、その後は、導水路は民間会社に利用され続けたようである。



第 77 図 「銅薬方」(武雄市歴史民族館蔵一部改変) ※施設名は松尾千歳氏ご教示による。

第2節 高熊山激戦地跡

確認調査成果や史料調査から、高熊山激戦地跡の戦闘状況や、各堡壘の機能などの検討を行う。

1 戦闘状況

第4章第1節3で概略を記述しているが、明治10(1877)年6月18日～6月20日の戦闘状況を詳細にまとめることがある。主に『別働第二旅団戦記卷之四』(安藤1887)や『戦報日記』(高野1986)を参考に記述する。

6月18日

午前0時～2時頃 第3旅団が複数の中隊に分かれ高熊山を目指して山野を出発する。

午前3時30分頃、高熊山で開戦

第3旅団に対し、高熊山の西郷軍熊本隊が射撃と投石で対抗する。

午前7時頃 高熊山の西郷軍堡壘に迫るも、山が陥しく死傷者が多くなり、第3旅団は退却する。

明け方 別働第2旅団高嶋少佐、三好成行が第28中隊、第30中隊を率いて、高熊山を射撃する。三好成行は、第3旅団の苦戦を助けるため、西郷軍熊本隊を横から攻撃を行う。

午前10時頃 宮城彦八隊、第21中隊、第22中隊を率いて芝立山を出発する。西郷軍正義隊らの堡壘を破り、坊主石山を占領する。

西郷軍の雷撃隊と協同隊が坊主石山の奪還を図るため、臼砲2門で東南より激しく砲撃するが、失敗する。

6月19日

熊本隊は砲弾を避けるため、巨岩に隠れ、時々小銃で応戦する。夜、村民数十人を使って堡壘を修理し、砲弾を避けるための坑道を掘削する。

大雨に濡れたまま終日官軍の砲撃に悩まされたため、疲労困憊し、皆刀を抱いて眠る。

政府軍は、大砲12門で高熊山を砲撃を行う。

6月20日

午前1時頃 第3旅団中隊が陣地を出発する。

午前3時頃 大雨の中、第3旅団が暗闇を利用し、熊本隊の熟睡に乗じて高熊山に進撃し、熊本隊の堡壘を次々に占領する。

午前5時頃 第3旅団が高熊山を占領。熊本隊は暗闇の中で第3旅団の不意の襲撃を受け、麓に向けて潰走。岩石の間を駆け下り、転落してけが人も出る。

午後4時半頃 第3旅団の一部は、菱刈馬越まで逃げる西郷軍を追撃し、戦闘が終了する。

熊本隊の戦死者13人、負傷者数十人に及ぶ。政府軍は、17日～20日に戦死者1名、負傷者23人で、この3日間に280発余りの砲弾を発射する。(西郷軍は政府軍により、高熊山に三方から700～800発の砲撃を受けた記載あり)



第78図 高熊山の戦い戦況図

2 堡壘について

堡壘2号～7号は、単体で構築されてはいるが、前後2段の1つの巨大な堡壘として機能したと推定される(全長約20m・幅約10m)。堡壘7号は、小隊長などの指揮者が陣取ったものと考えられる。

堡壘1基あたりの守備人数については、当時の銃の全長が1.25mである。そのため、左右にある程度自由に動かすには、1人あたり、約2.5mが必要となる。この試算に基づけば、堡壘7号(全長10.80m)には、5～6人が、堡壘3～6号(全長4～6m)は、2～3人程度が守備していたと考えられる。堡壘2号は、これらの堡壘の端に位置しており、弾薬などの物資を置いていた可能性がある。なお、高熊山山頂には熊本隊の2つの中隊(高野和人1986)と配置ある。熊本隊発足当初が15小隊(約1,300人)であったが、人言で5中隊に編成され、1中隊100人となり、約200人が配置されたと推定される。この人数から西南戦争時は、さらに数多くの堡壘が構築されたと考えられる。

胸壁については、高さが計測値では低いが、実際は斜面に面しており、下から登ってくると高い壁が立ちはだかる事となる。また、堡壘8号・9号は、巨石を利用して高さを稼いでいる。胸壁には、多量の輝石安山岩が含まれており、強固なものとなっている。堡壘9号は、胸壁は巨石と輝石安山岩からなり、地形を利用した構造となっている。熊本市の調査では、胸壁に稲藁や墓石を利用したことを報告しているが、高熊山では、人工物の利用ではなく、自然地形と地盤の輝石安山岩を利用して、胸壁を構築したこと分かる。

北東から東側で銃弾が出土したことから、この方面で激しい戦闘が行われたと考えられる。胸壁から銃弾が出土し、種類も混じっている。また、薬莢も出土している。かなりの至近距離での戦闘が想定される。政府軍の戦闘報告書には、「午前一時整列直二出発高熊山下ニ至リ卒ニ令シ賊壘ニ達セシバ発火ヲ禁ス準備已ニ終テ兵ヲ潜メ山頂ノ賊壘ヲ指シテ撃滅墨ヲ立ム識ニ五六米突時ニ三時我全兵大銃銃筒ヲ揮テ突入賊狼狽成ハ放火スルモ弾着高ク或ハ降雨ノメ為雷管鳴ヲ傳火フ得ス漸時ニシテ賊ノ三里ヲ奪フ直ニ敵砲三火シ更ニ追テ又數里ヲ陥ル是ニ於テ兵ヲ半月ニ布キ猛烈火夜ノ明ルヲ候ツ天明ケ全山ヲ掠シ猶山下ノ殘賊ヲ尾撃シ此夜馬越ノ右側ニ於テ守禦ス」C09084800200 戦闘報告表(防衛省防衛研究所)、下線部要約「午前3時、山頂の敵台場から5,6mに達し全兵大声を上げ銃剣で突入した。」と記載があり、調査結果と合致する結果となっている。

なお、『戦抱日記』には、熊本隊が高熊山山頂に宿舎を建てた記録や、上記の『戦闘報告書』の二重線部分にも、それらを焼いた記載があるが、今回の調査では、その痕跡を発見することはできなかった。

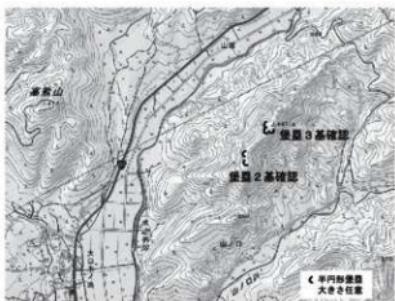
3 坊主石山の堡壘について

高熊山から東へ約1kmほどの所に、坊主石山がある。当時の記録では、芝立山に政府軍が、坊主石山に西郷軍雷撃隊が陣取る。現在芝立山という名称ではなく、坊主石山となっている。

坊主石山の踏査の結果、5基の半円形堡壘を発見した。すべての堡壘が西の高熊山を向いており、政府軍(別働第2旅団)の堡壘の可能性が高い。1基は整然と巨石を並べて、胸壁を構築している(第79図左上)。また、山頂には巨石があり、鉄鉢が奉納され、その下には「明治13年庚辰2月吉日、奉願成就、順主野口八太郎(所属不明)」という石の水鉢が奉納されていた。おそらく、西南戦争時に出発する際に、鉄鉢を納め、無事生還したことに感謝したものであろう。



第79図 坊主石山状況写真
左上: 堡壘 右上: 巨石と手鉢 左下: 鉄鉢 右下: 手鉢



第80図 坊主石山堡壘位置略図

第3節 チャケ迫堡星跡群

確認調査成果や史料調査から、牧園全体の陣地状況と、堡星の構築について検討を行う。

1 牧園全体の陣地状況について

牧園の戦闘状況や堡星の配置については、史料がなく、不明な部分が多い。ここでは、『堡星群が語る西南戦争』(手嶋 2018)をまとめ形で考察する。なお、第 82 図に示してある堡星は位置であり、数は示していない。

(1) 位置と数

明治 10(1877) 年に西郷軍と政府軍が構築した堡星は、第 82 図に示した霧島市牧園町と横川町の南北約 7 km、東西 5 km に点在している(手嶋 2018)。牧園(蹄)に軍務所を置いた西郷軍は、牧園一帯に 300 を超える堡星を構築している。そのほとんどは、7 月の戦闘で構築されたものと考えられる。西郷宿营地は、8 月 30 日の笠取峠を突破しようとした際の場所である。

政府軍は、6 月末に横川を制圧し、横川の植村、牧園の万勝付近に堡星を構築している。宿窪田にみられる堡星は、7 月の戦闘ではなく、8 月の戦闘に備えて政府軍が構築したものである。なお、堡星所属の判断は、胸壁の方向からとしている(手嶋 2018)。

(2) 堡星の配置

西郷軍は横川と牧園を結ぶ、芦谷原～宿窪田(現在の牧園薩摩線県道 50 号)を、重要な場所と位置づけ堡星群(第 1 線)を設置したとしている。そして、後方の山々の山頂、尾根等に第 2・3 線の堡星を設けたとしている。全体の踏査結果から、堡星の配置の特徴として、以下の 4 つを述べられている(手嶋 2018)。

- ① 後方・左右に堡星があること。
- ② 高い位置にあり、道路・崖・急峻な斜面にあること。
- ③ 周囲(前方・左右)の見通しが良好であること。
- ④隣接する堡星群と数分以内で連絡できること。

第 82・83 図から、もう一つの可能性を考察したい。北西(植村・万勝)方面から進攻していく政府軍に対して、第 1 線を引坂追へ芦屋谷、谷を挟んで第 2 線をチャケ追へ宿窪田、天降川支流の石坂川・三体川を挟んで第 3 線を宇都口～坂元へ蹄城跡とした可能性がある。

各堡星の配置場所は、概ね手嶋氏が述べている①～④のとおりである。5～10 基の堡星が集まり、群を成している。さらに、それらが、地形に合わせて配置され、第 1 線のような守備陣地を構築したものと推定される。

現在の各堡星構築場所は、雑木林が広がっており、高い位置でも見通しはほとんどきかない。しかし、当時は、木々は燃料として使用されており、木はほとんど無かつた。高い位置からは、かなり見通しが良かったはずである。西郷軍は、この地に 300 以上の堡星を築いたことから、劣勢ではあったが、牧園で防御し、反転攻勢をかけようとした好機をうかがっていたのかかもしれない。

2 堡星について

(1) 形状について

堡星の全体形状については、高熊山激戦地跡・チャケ迫堡星跡群とも、半円形堡星とタコツボ形堡星が確認された。牧園では円形や L 字形をした堡星が報告されている。半円形堡星は、胸壁が半円状又は弧状になるものが多く、土坑は弧状、半円、円形、長楕円形、長方形となるものが報告されている(手嶋 2018)。また、大分県佐伯市では、政府軍の熊本鎮台工兵隊の構築と考えられる多稜形(四稜形・六稜形)の堡星が報告されている(大分県 2009)。

タコツボ形以外は、すべて胸壁があるタイプの堡星である。鹿児島県・大分県とも、半円形堡星が多数を占める。また、大分県ではタコツボ形堡星の報告はないが、休憩所や物資保管所と報告のある土坑状に掘り込まれた遺構が、タコツボ形堡星と推定される。

大分県の内訳

866 基の堡星のうち、実測図及び報告内容(大分県 2009)から、151 基の形状を把握できた。

第 29 表 大分県・鹿児島県堡星形状内訳

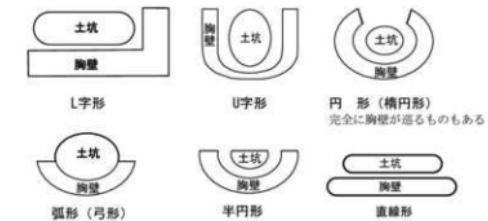
大分県

形状\所属	西郷軍	政府軍	両軍	不明
L字形	0	3	0	0
U字形	1	2	0	0
円形	4	0	0	1
帯形	1	0	0	0
弧形	3	15	0	0
多稜形	0	6	0	0
楕円形	1	0	0	0
直線形	3	5	0	0
半円形	48	40	2	1
不定形	2	10	0	0
弓形	2	1	0	0

鹿児島県の内訳

300 基以上の堡星のうち、略図及び報告内容(手嶋 2014・2018・2020)から、90 基の形状を把握できた。

形状\所属	西郷軍
L字形	5
U字形	0
円形	27
帯形	0
弧形	0
多稜形	0
楕円形	0
直線形	6
半円形	32
不定形	0
弓形	0
タコツボ形	20

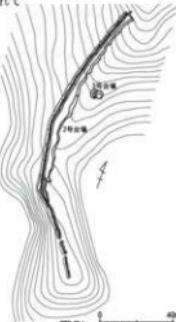


弧形と半円形は、ほぼ同一形状である。

高熊山駿駆地跡・チシャケ迫堡塁跡群では、弧状のものも半円形堡塁として報告している。なお、弧状と報告されている堡塁は、胸壁のみのものが多い傾向がある。



大分県佐伯市大原遺跡で5種類の種が多数ある
堡塁が報告されている（大分県教育委員会2009）。



（大分県教育委員会2009第37回 一部改変）

大分県豊後大野市旗返岬で、全長450~500m
の地形に沿って築行していると報告されている
（大分県教育委員会2009）。

第81図 堡塁模式図及び類例

（2）チシャケ迫堡塁跡群の堡塁の構築方法について

堡塁のトレントン調査の調査の結果、土坑を掘り上げた土で胸壁を構築していることが確認できた。ほとんどはシラスで、基礎にあたる部分には黒褐色土の土が見られる。胸壁全体にしまりがなく、版築のような堆積状況は見られなかった。山道や林道を見渡せる高さに位置しており、水平に攻撃されることは無いため、地形を利用して胸壁にある程度の厚みを保たせて、銃弾を防ぐ方法が取られたと考えられる。

牧園の山々は、基本的にシラス台地が河川開拓によってできた丘陵であり、ほとんど石を含まない。人工物（稻藁や墓石）を持ち込むこと無く、現地にある土のみを利⽤して構築している。

第4節 岩川官軍墓地と薩軍の墓

確認調査成果や史料調査から、埋葬形態の検討、古写真の撮影場所などの検討を行う。

1 埋葬形態の検討

岩川官軍墓地の埋葬形態については、「官軍墓地の埋葬は、遠く大崎仮宿、野方荒佐野、百引の激戦地から死体を運び、一たん現在墓地手前の人家のあるあたりに大きな穴を掘り、そこに仮埋葬、その後現在の所へ移して埋葬した」という。埋葬にあたっては火葬にした説もあるが、馬場部落の古老馬場精八氏は火葬ではなく、そのまま埋葬したとはっきり言った。なお、都城の病院で死んだ人たちもここへ持ってきて埋葬した」と記述されている（大隅町誌編纂委員会1990）。

調査では、墓地中央部のトレントン3（第72図）から2基の遺構を検出している。全形を確認できていないが、想定される根拠から、官軍墓地の墓坑の可能性が高い。また、トレントン1（第70図）・トレントン2（第71図）の調査成果から、各墓石下には、墓坑がないことが判明している。そのため、合葬の可能性が高い。

熊本県の調査事例では、八代市の若宮官軍墓地において、等間隔に個別の墓坑が掘られている。同市の横手官軍墓地では、溝状墓坑に複数の棺が埋設されたものと、個別の墓坑とに分類されている（共に八代市教育委員会2002）。玉名市の高瀬官軍墓地では、溝状墓坑と個別の墓坑が確認されている（玉名市教育委員会2018）。各官軍墓地とも、土葬と考えられる調査結果が得られている。

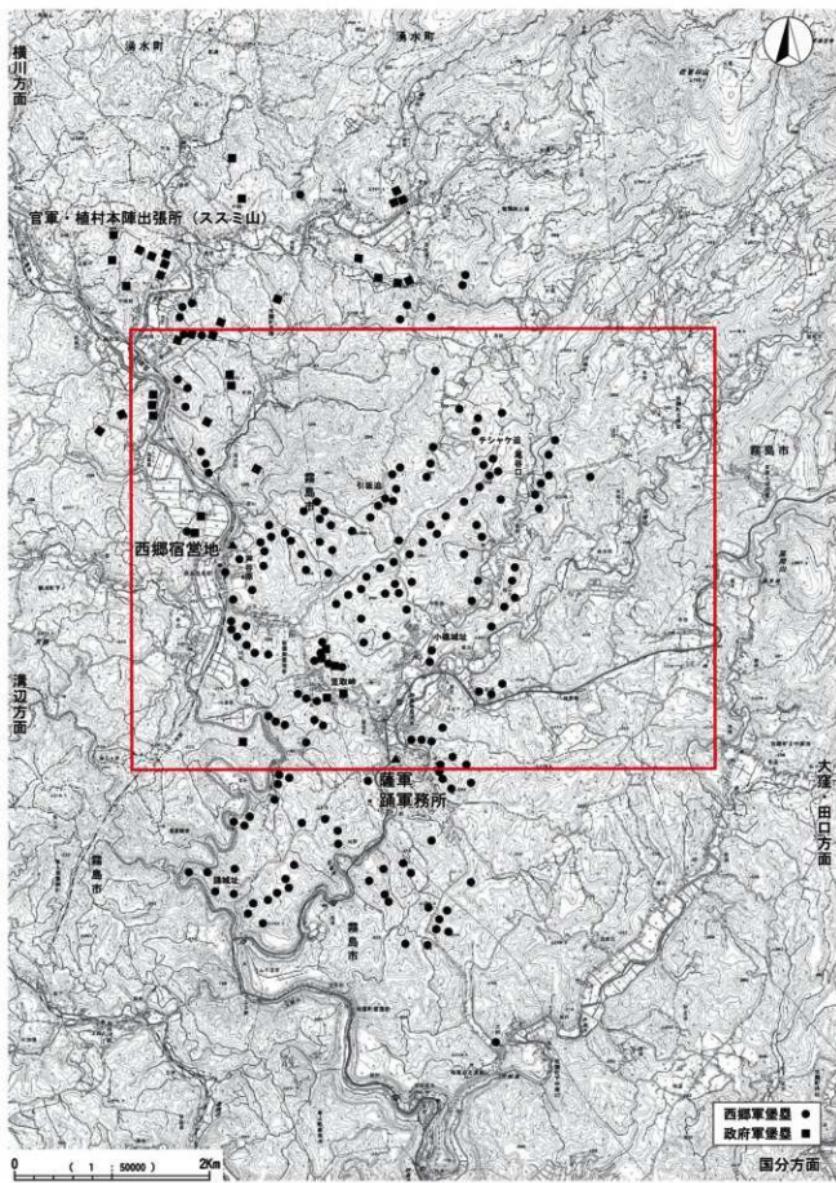
『大隅町誌』と調査成果、先行事例から埋葬形態を検討する。各激戦地から遺体を運んでいれば、仮埋葬後に、改葬を行い遺骨だけを岩川官軍墓地に合葬したと推定される。今回の調査では、火葬・土葬に結びつく調査成果は得られなかった。なお、仮埋葬地とされる場所は、第63図に推定位置を記載している。現在は空き地・空き家となっている。

2 造営場所選定理由について

現在の場所が、なぜ墓地の造営場所に選定された理由は、今回の調査では不明であった。

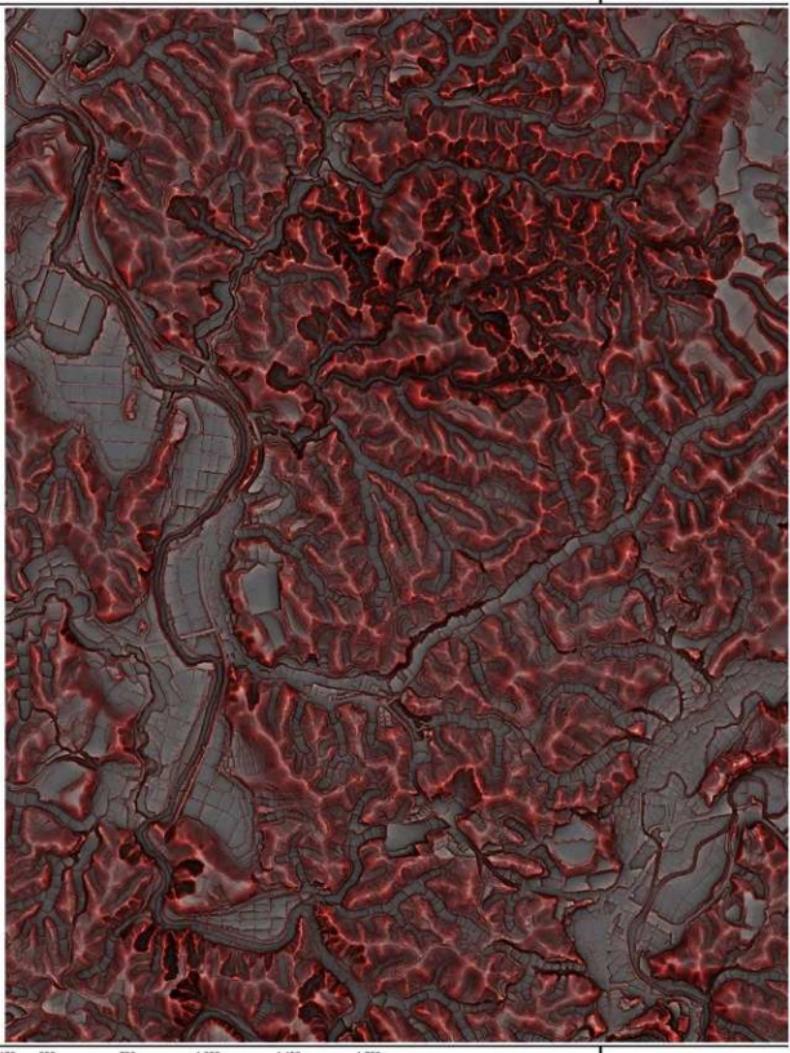
岩川官軍墓地については、埋葬されている兵士の戦死場所から推定する。

岩川から各埋葬者の戦死場所であるが、最も数の多い百引は約14km、次の市成は約12.5km、都城16.5kmと永吉・假宿約17km、荒佐野約11kmとなる。位置的には、各戦死場所のおおよそ中間に位置しており、地理的に便利性が高い。このため、この地に官軍墓地が造営された可能性がある。

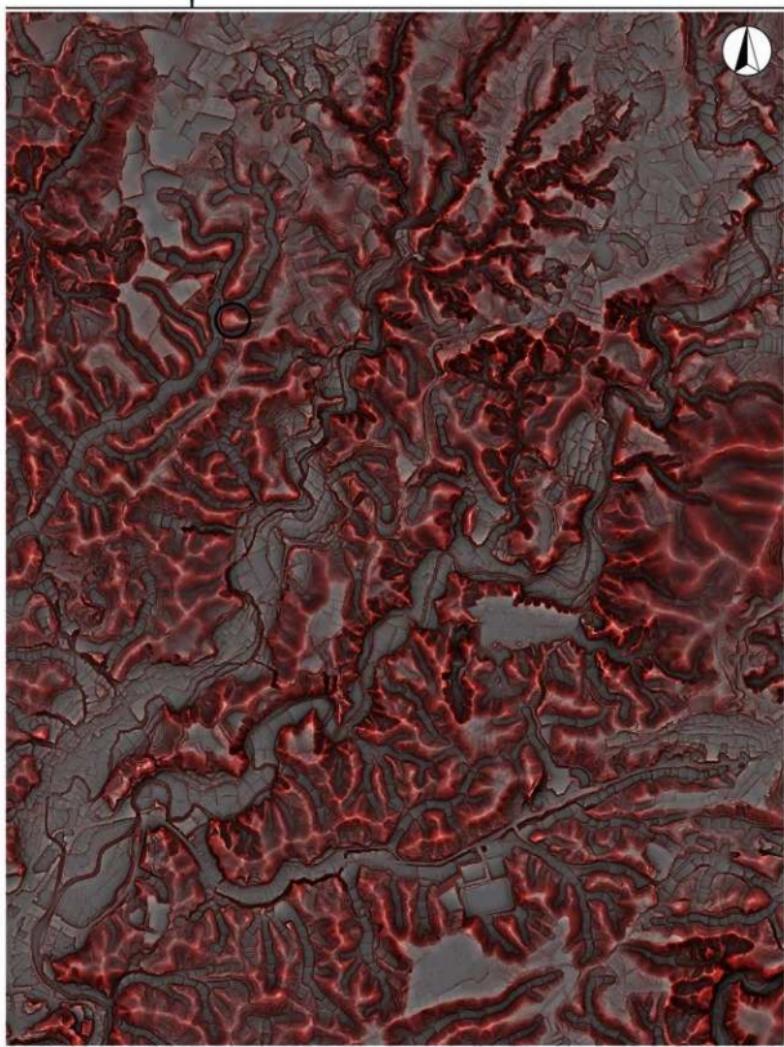


第 82 図 牧園町堡壘位置図 (手嶋 2018 引用・一部改変)

※ ●・■は堡壘の位置を示すもので、数を表すものではない。
※ □は、第 83 図チシャケ追堡壘跡群周辺赤色立体地図の範囲



第 83 図 チシャケ追堡跡群周辺赤色立体地図



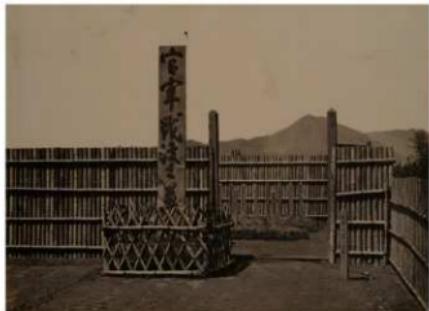
※平成21年計測データを使用(国土交通省 九州地方整備局 大隅河川国道事務所)

○ チシャケ迫堡塁群跡

薩軍の墓については、西郷軍が撤退するときに死傷した者を、地元の有志に託していた可能性がある。たまたま託された人の土地に、葬ったのかもしれない。

4 岩川官軍墓地の古写真について（第 84・85 図）

岩川官軍墓地の古写真として、「官軍戦没之墓」（井桜 2010）が紹介されている。古写真①は入り口付近（第 84 図）、古写真②は木柱の官軍墓地（第 85 図）である。「鹿児島県曾於市大隅町にある西南戦争で戦死した官軍墓地であろうか」（井桜 2010）と記載がある。その経緯については、岩川官軍墓地と著者が想定した理由として、古写真①「鹿児島陸軍墓地其一」・古写真②「鹿児島陸軍墓地其二」と書かれた紙が写真下に張ってあること、木柱が少ないため、埋葬者の多い鹿児島市の祇園之洲ではなく、岩川官軍墓地だと推測したこと、古写真①の写真背景が桜島には見えないこと、以上の説明があった。



第 84 図 古写真① (JCII フォトサロン蔵)



第 85 図 古写真② (JCII フォトサロン蔵)

古写真②から戦死者名 4 人、仙台庄之助、池田秀周、高橋常蔵、中西宗三郎の刻字を読み取り、戦死場所や埋葬場所の調査を行った。その結果、いずれも熊本県で亡くなっている、仙台庄之助、池田秀周、高橋常蔵は有明堂官軍墓地（山鹿市）、中西宗三郎は高月官軍墓地（玉東町）に埋葬されていることが判明した。この調査結果や、墓碑が木柱であることから、この 2 枚はいずれも、熊本県（場所不明）の仮埋葬地の可能性が高い。

※井桜直美氏 (JCII フォトサロン)、美濃口雅朗氏 (熊本市文化振興課) には、史料調査にご協力いただいた。

5 岩川官軍墓地の整備状況

岩川官軍墓地は 140 年間に渡り、地元の方々により整備されている。ここでは、その整備状況をまとめる。

造営時期は文献調査等を行ったが、不明であった。熊本県の例によると、陸軍から天草石工（下浦石製）が請け負った官軍墓地は、明治 11（1878）年～明治 12（1879）年に建設及び落成している（玉東町 2012）。鹿児島県も同様の状況と推定される。

管理については、神官をしていた川崎篤義氏が経費をもらって墓地の管理をしていたことが記述されている（大隅町誌編纂委員会 1990）。昭和 8（1933）年に第 67 図が最も古い岩川官軍墓地の記録であるが、官軍墓地造営当時の姿と推定される。この略図（第 67 図）は、岩川尋常小学校丸山義武訓導から、静岡県の大橋敦氏へ宛てた手紙の中に残っている。大橋氏は、第 22 表配置 No. 24 の大橋良蔵兵卒の遺族であろう。

その後は、不明な部分が多いが、地元の 70 ～ 80 歳代の方々への聞き取りから、概ね昭和 20 ～ 30 年頃には、第 67 図の墓石の配置でなく、現在の階級別の配置に近いことを証言している。昭和 8（1933）年から昭和 20（1945）年までの間に大きな整備（改変）を受けている可能性が高い。それ以後は、周辺の墓地の整備に伴って、官軍墓地も徐々に整備されたと証言されている。

「土砂が流れ込んだりして大分荒れていた。昭和 42（1967）7 月には、大隅町商工会青年部で顕彰することとなり、墓石の周囲の置石（縁石のこと）も掘り出され、墓地周辺にブロック塀をめぐらし、入り口もコンクリートで固めた。そして、献灯（寄贈）も 2 つ設けられた。」（大隅町誌編纂委員会 1990）と記述されている。この時の整備が、現在の岩川官軍墓地とほぼ同一であると考えられる。

最近は、平成 25（2013）年に、馬場集落の墓地の管理者が、曾於市の許可を得て、縁石と破損した墓石を接合している。

第30表 岩川官軍墓地の整備状況

西暦	元号	岩川官軍墓地整備内容
1877	明治10	現在の岩川官軍墓地向かいの空き地に仮埋葬『大隅町誌』(改訂版)
1878～1879	明治11～12	陸軍により、建設及び落成される。(推定)
	明治～昭和	神官をしていた川崎篤義氏が経費をもって墓地の管理を行う。『大隅町誌』(改訂版)
1933	昭和8	岩川尋常小学校丸山義武訓導から、静岡県の大橋教への手紙(第67回配置図あり)
～	1945～1955	現在の階級別の配置に近い整備が行われる。(推定)
～	昭和20～30年頃	周辺墓地の整備に伴って、岩川官軍墓地も整備される。
1967	昭和42	大隅町商工会青年部によって、現在の形に近い整備が行われる。
～	平成25	地域住民により、手厚く祀られる。馬場集落の墓地の管理者により、縁石や墓石の修復が行われる。

第5節 西南戦争関連遺跡の現状と課題

滝ノ上火薬製造所は、敷根火薬製造所と合わせて、日本最大級の火薬製造所となっていました。これが、軍事的な背景を持って、薩摩藩が明治維新を成し遂げる一要因となっていました。その後、明治に入り滝ノ上火薬製造所は、多くの砲弾や銃弾を製造・備蓄できるようになっていく。そのため、政府は、その存在を徐々に危険視していく。

政府が滝ノ上火薬製造所から、武器・弾薬を運び出しことがなければ、私学校徒を刺激することなく、西南戦争は勃発しなかったかもしれない。このことは、当時の県令大山綱良が審理で、政府側が鹿児島に蓄えている武器・弾薬類を運び出そうとしたことが、西南戦争を引き起こした要因であると述べていることからも想定できる。

その後は、西南戦争により、鹿児島城下や集成館を始めとする工場群もほぼ壊滅状態になり、再建されることはなかった。西南戦争前の鹿児島が日本の近代化・工業化をリードしている状況であったが、この状況も一変し、鹿児島は工業と薄い地域となったとの指摘もある(松尾2017)。このように滝ノ上火薬製造所を始めとするこれらの施設は、近代化・工業化を成し遂げた一方で、鹿児島の工業力に大きな打撃を与えた存在でもあった。滝ノ上火薬製造所などの軍事的な施設がなければ、鹿児島は今でも一大工業地帯だったかもしれない。

また西南戦争では、薩摩藩の私学校徒や各地から參加した抗薩諸隊などの優秀な人材も、高熊山激戦地跡やチャシケ迫登墨跡群や熊本県等の各地の激戦地で散っていった。これは、政府軍も同じで、全国各地から徵兵された人々が現在も、岩川官軍墓地などの故郷から遠い地

で葬られている。

一方で、鹿児島の近代化・工業化で培われた人材や使用された機械は、東京や大阪等で、日本の近代化・工業化の基礎を築き、ひいては日本の産業革命の成功へと突き進んでいく要因となっていた。このように、薩摩藩と日本の近代化・工業化に関係し、国内最大で最後の内戦である西南戦争を忘ることなく、残すことも我々の大きな役目である。

鹿児島には、現在把握しただけでも約100か所の西南戦争関連遺跡が残っている。史跡等となっているのは10か所だけである。69か所は記念碑で神社や寺院にあるため、保護されているが、13か所ある陣跡は民有地で山林が多く、伐採に伴う消失が懸念される。標識等があつても、管理が行き届いていない場所も見受けられる。

一方で、世界文化遺産登録や明治維新150周年・大河ドラマ「西郷どん」の影響で、明治維新前後の鹿児島に注目も集まり、関心も高い。今後は、西南戦争150周年に向けて、現存する「西南戦争関連遺跡」を活用し、その重要性を周知していくことや当該市町村と適切な保護措置、各地に残る「西南戦争関連遺跡」の実態解明を進めいくことが望まれる。

現在残っている西南戦争関連遺跡を、善意で調査や保存、活用及び管理を行ってきた地元の方々の存在を知ることができた。このような方々により、かろうじて残存してきた西南戦争関連遺跡は、貴重な文化財である。最後に、このような地元の人々に敬意を表し、今回調査した各遺跡の現状と課題を述べ終わりとしたい。

1 滝ノ上火薬製造所跡

今回の調査で、非常に良好に遺構が残存していることが確認された。絵図等の記録から今回の調査範囲だけではなく、対岸等にも広がっていることが予想されることから、滝ノ上火薬製造所跡全体の確認と、遺構の残存状況等の把握が必要である。また、石垣や導水路については今回の調査では、年代決定となる遺物等の出土がなく、構築・使用・廃絶の時期の検討、石垣上の平坦面等の使用方法や、建物の痕跡を調査するために追加調査が必要である。

なお、現状は周知の埋蔵文化財包蔵地となっているが、石垣は土圧により一部孕らんでいる部分もあり、崩壊の危険性がある。文化財の保護や災害防止の観点からも、追加調査を行い、今後の取扱いを決め、保護措置を講じる必要がある。

2 高熊山激戦地跡

現状は、伊佐市の史跡として指定されている。

熊本隊の規模や文献等から、高熊山の各尾根にも堡塁が構築され、残存している可能性がある。また、高熊山東側の坊主石山にも辻見十郎太率いる雷電隊が陣を構築し、高熊山西側方向、水俣との街道筋にあたる鳥神岡に

は、西郷軍が堡塁を構築している可能性が高い。このようすに、高熊山を中心とする大口一帯の当時の政府軍・西郷軍の陣地の全体像を調査する必要がある。

高熊山激戦地跡は、公園として整備されており、市民の憩いの場となっている。しかし、文化財の活用までには至っていない。従って今後、公園としてだけでなく、適切な保護策を講じて、史跡としての活用が望まれる。

3 チャケ迫堡塁跡群

今回の調査で周知の埋蔵文化財包蔵地となった。

霧島市牧園町には、堡塁跡が多数存在していることが分かっている。しかし、詳細な位置が不明なため、保護の対象となっていない。今後は、それらの詳細な位置や残存状況の調査により、保護すべき対象地域を検討する必要がある。また、戦闘記録などの史料が少なく、それらの掘り起しを行い、牧園での戦闘の実態を解明するとともに、堡塁群の保全と活用について、議論を深める必要がある。

普及・啓発面では、霧島市の「牧園に残る西南戦争堡塁跡調査・保存事業」として、牧園町の住民らで組織された「史跡・文化財・景観モデルロード実行委員会」により、定期的に講演会や見学会など、史跡や文化財の保護の普及・啓発活動が行われている。今後、さらにその発展が望まれる。

4 岩川官軍墓地・薩軍の墓

現状は両地点とも、曾於市の史跡に指定されている。

地元の人々によって、約140年間祀られてきた貴重な史跡である。しかし、その設立の経緯などは、未だに不明な点が多い。今後は、史料の掘り起しを行い、鹿児島における官軍墓地の設立や実態を調査する必要がある。また、岩川官軍墓地や薩軍の墓の整備等を行う際は、墓坑の調査や岩川官軍墓地の前に仮埋葬地とされる場所の再調査なども行う必要がある。

地元の商工会や有志により、長年整備が行われてきた。また、年に1回慰靈祭が行われている。地元の方々の関心が高い史跡でもあるので、今後の地域や他の文化財を取り込んだ仕掛け作りで、活用を図ることが望まれる。

【引用・参考文献】

- 大分県理蔵文化財センター 2009『西南戦争戦跡分布調査報告書』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 44
玉東町教育委員会 2012『玉東町西南戦争遺跡調査総合報告書』玉東町文化財調査報告書 第8集
玉名市教育委員会 2018『高瀬官軍墓地』玉名市文化財調査報告 第39集
八代市教育委員会 2002『若宮官軍墓地跡・横手官軍墓地跡』八代市文化財調査報告書 第16集
大隅町誌編纂委員会(編) 1990『大隅町誌』(改訂版)
安藤定 1887『別働第二旅团戰記卷之四』
井桜直美 2010「彦馬が見た西南戦争 -古写真に見る西南戦争の記録-」JCII フォトサロン
高野和人編著 1986『戦抱日記』古閑俊雄著 青潮社
佐々友房 1891『戦抱日記』
高橋信武 2005『高熊山』『西南戦争之記録 第3号』
高橋信武 2017『西南戦争の考古学』吉川弘文堂
手嶋正次 2014『西南戦争の堡塁に関する調査報告書』
手嶋正次 2018『堡塁群が語る西南戦争～霧島の山々に眠る「十年の戦の跡」～』
手島正次 2020『西南戦争 牧園に残る戦いの証拠』
松尾千歳 2017『西南戦争と集成館』尚古集成館紀要 第16号
靖国神社社務所原善・高野和人編著 1990『靖国神社忠魂史 西南の役』(復刻版)青潮社

写 真 図 版

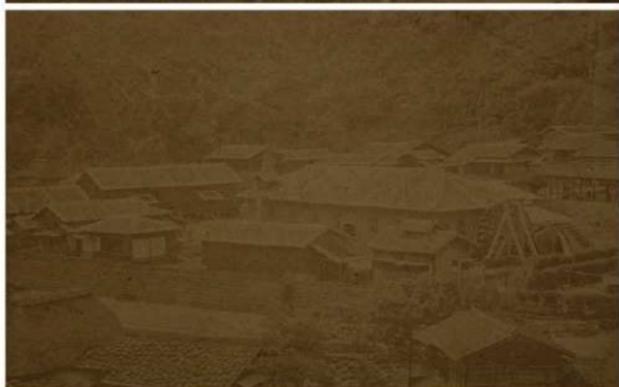
図版 1 滝ノ上火薬製造所跡 古写真



①
名称 火薬製造所
撮影時期 1872（明治5）年
東京国立博物館
研究情報アーカイブス
から引用



②
名称 火薬製造所
撮影時期 1872（明治5）年
東京国立博物館
研究情報アーカイブス
から引用



③
名称 火巧所
撮影時期 明治
東京国立博物館
研究情報アーカイブス
から引用

図版2 滝ノ上火薬製造所跡 調査区1



①



②



③



⑤

①石垣 ②石垣テラス ③排水路石垣
④トレンチ2 A-A'平面 ⑤トレンチ2 基石



①トレンチ4 調査前状況 ②トレンチ4導水路 ③・④トレンチ3導水路 ⑤トレンチ5 ⑥トレンチ8



①



②



③



④

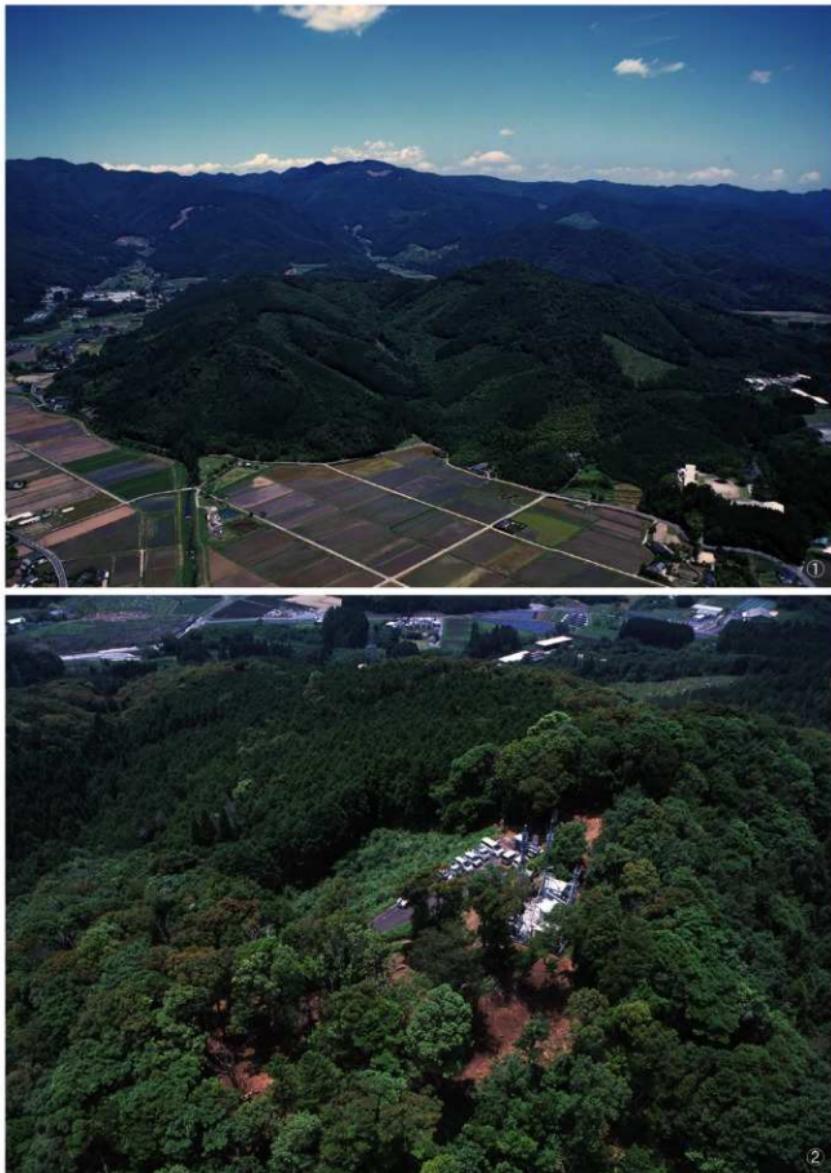
①・②調査区1～2石垣 ③調査区2石垣 ④調査区2導水路

図版5 滝ノ上火薬製造所跡 調査区3 導水路



①導水路1～3 ②導水路1・2 ③導水路2・3 ④導水路1 ⑤導水路3

図版 6 高熊山激戦地跡 遠景



① 高熊山を南西から ② 高熊山山頂

図版7 高熊山激戦地跡 堡塁1号～7号



①堡塁1号 ②堡塁2号 ③堡塁3号 ④堡塁4号 ⑤堡塁5号 ⑥堡塁6号 ⑦・⑧堡塁7号